羅生門　　芥川龍之介

教材のねらい

1　選定の理由

「羅生門」は、起承転結の結構が整い、古典に材を取りつつ、言葉による虚構（フィクション）の世界の展開が明確であり、人間心理の微妙な変化を読み取ることができる点で、小説の基本的な特質をつかむ目的に適した入門教材である。濃密な闇の世界は日常的な価値観とはかけ離れて妖しい魅力に溢れ、下人と老婆の関わりのドラマが緊張感を高めながら切迫した条件下での生の諸相を照らし出していく。各場面で下人の心理の揺れ動きを把握し、暗示的な結末に至るまでの筋道を追うことで、虚構の世界ならではの効果に満ちた読書体験を得ることができる。注意深く読めば、下人や老婆の主張する行動原理は決して万人が納得できるものではなく、その矛盾に生きる人物たちを作品世界に配した意味の考察が必要になる。生徒たちの「正しさ」の基準も、成長と共に変化し複雑化するだろう。作品を通じて対話と思索を促すことに適している。

また、古典籍に目を通しながら虚構世界を現在進行形で創作しつつある「作者」を顕在化させるメタフィクションの要素を含み、近代の活字文化と共に隆盛を極めた小説というジャンルが原理的にはらむ特色をわかり易く示している。

2　指導のねらい

まずは作品の舞台設定や構成（起承転結）を整理し、具体的な展開と表現に即して作中人物の揺れ動く心理を丁寧に理解していく練習をしたい。前半部分で時代背景や情景描写に筆を割いた語り手は、「作者」として作中人物との間に明確な距離を置くが、その語りの姿勢が小説全体に与える効果に注意を向けさせたい。典拠と比較した際、常識的な価値観を揺さぶる問いかけが読者に向けられている点を共有しておきたい。

(1) 具体的な表現に即して一連の状況下での心の変化を追い、善悪をめぐる基準がどのように変容していくのかを把握する。

(2) 人物や情景の描写の特徴、比喩によるイメージの喚起力などの表現効果に注意し、作品の世界観やテーマとの結びつきを考える。

(3) 作中に「作者」が登場する効果と意味について考え、小説の自由さを理解する。

(4) 下人の選んだ生き方とその後の運命について話し合い、現代に生きる私たちの価値観とかかわる問題について思いを巡らす。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで内容や展開を的確に捉えることを学び、作品の特色をつかもうとし、学習課題に沿って、舞台設定・構成・描写に対する理解を深めようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 小説を虚構として捉えさせる。 2 作品を全体として大づかみに捉えさせる。	① 小説という文学ジャンルについて学ぶ。知技 ② 芥川龍之介とその作品について、知っていることをあげる。 ③ 全体を通読して、第一次の感想をメモする。疑問点や印象の強い点をあげる。 ④ 全体の構成を考えて、段落分けをする。思判表	① 「虚構」の役割を明確にする。 ② 教科書の作者紹介の範囲でとどめる。 ③ 作品の印象の傾向をとらえる。通読にはＣＤ教材の利用も考える。 ④ 場面の転換箇所に注意を促す。
展開	1 舞台と主人公の状況をはっきりさせる。 2 主人公の心理の問題点をつかませる。 3 主人公の心理の動きを追わせる。 4 舞台効果に注意させる。 5 主人公の心理の変化とその理由をつかませる。	① 〈第一段〉（初め～Ｐ一八六・6） 作品世界の社会状況、主人公の人物、状況をまとめる。 ② 舞台である羅生門の雰囲気をつかむ。 ③ 主人公である下人の心理の中心点をつかむ。思判表 ④ 小説の語り手のあり方に注意する。思判表 ① 〈第二段〉（Ｐ一八六・7～Ｐ一八九・9） 主人公の心理の変化を順を追って整理する。思判表 ② 主人公の憎悪の内容と特徴を考える。 ③ 主人公の心理を第一段の主人公の心理と比較する。思判表 ④ 舞台である羅生門楼上の空間の意味を考える。	① 地図、古典作品などの資料を生かす。 ② 復元写真によりながら、本来の偉容と作中の荒廃を対比する。 ③ 追いつめられた者のためらいに注意させる。 ④ 語り手が作者を名乗ることの効果を考えさせる。 ① 「構成」２を参考に、図表化を試みる。 ② 「雨の夜」「羅生門」という場の雰囲気と関連づける。 ③ 心理の反転、善と悪、ためらいと一途さなどを対比させる。 ④ 非日常的な空間が現出することに言及する。

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
展開	6 老婆の論理の要点をつかませる。 7 比喩の効果を考えさせる。	①〜④〈第三段〉（P一八九・10〜P一九二・4） ① この段の短編小説としての構成上の役割を考える。 ② 主人公の心理の変化とその理由を明らかにする。思判表 ③ 老婆の論理の要点をつかむ。思判表 ④ 老婆に対する比喩表現の特徴と効果を考える。知技	①〜④ ① 動的な変化が起こる「転」の場面であることを指摘する。 ② 気分が老婆との関係で変化することを踏まえさせる。 ③ 二点をあげ、両者の意味をそれぞれ明らかにする。 ④ 動物の比喩の効果を考えさせる。
展開	8 主人公の決断と行動の心理をつかませる。 9 主人公のその後を考えさせる。	①〜④〈第四段〉（P一九二・5〜終わり） ① 主人公の勇気の内容を説明する。思判表 ② 老婆の論理が主人公の心理に与えた影響をまとめる。思判表 ③ 主人公の最後の行動の意味を考える。 ④ 末尾の一文の効果を考え、主人公のその後を想像する。主態	①〜④ ① 善と悪の方向をもとにまとめさせる。 ② 老婆の論理を逆手にとって口実に使う点を押さえさせる。 ③ 老婆に対する引剝ぎの意味を考えさせる。 ④ 下人の人間像の把握を前提にする。
まとめと発展	1 全体のまとめをして、主題について考えさせる。 2 作家と作品についてまとめさせる。 3 読書への展開を図る。	①〜④ ① 授業後の感想をまとめ、主題について考える。 ② 「学習のポイント」「言葉の学習」「言語活動」について深めていく。知技・思判表・主態 ③ 作者と作品について、必要事項を整理する。 ④ 作者のほかの作品を読み、表現を理解する。思判表	①〜④ ① 「主題」参照。唯一の正解はないが、単なる思いつきでなく、「論理」に裏づけされた説明を加えさせる。 ② 時間との関係で、取り立てて行う作業を選ぶ。ほかは授業で触れたことの確かめとする。言語活動 2 を行う際には、「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語」（一九五ページ）を通読させる。 ③ 大正期の文学での位置づけ、歴史物の後期、現代物の後期、出生と自殺などに言及する。 ④ 小説を中心とする読書指導と表現指導を試みる。

作者

芥川龍之介

明治二十五（一八九二）年～昭和二（一九二七）年。小説家。東京市京橋区入船町に新原敏三・フクの長男として生まれる。生後七か月で母が精神病を患ったため、母の実家に当たる本所区小泉町の芥川家に入籍、母の実兄芥川道章・トモを養父母として育った。芥川家は江戸城大奥にお数寄屋坊として仕えた旧家で、江戸情緒の残る下町の環境とともに、伝統的な文人趣味への親和を培った。江東小学校時代から既に江戸文学、明治文学に親しんだ早熟な文学少年であった。明治三十八年、府立第三中学校進学後は、古今東西の文学を濫読する一方、学業でも英語と漢文は抜群、歴史を好み、秀才の名をほしいままにした。四十三年、成績優秀により無試験で第一高等学校文科に入り、続いて大正二年、東京帝国大学英文科に入学。三年、豊島与志雄、菊池寛、久米正雄らとともに第三次「新思潮」を創刊、五年、中心メンバーとなった第四次「新思潮」に発表した「鼻」が夏目漱石の推挙をうけ、文壇へ登場した。同年、卒業、海軍機関学校の英語の嘱託教官となった。大正七年、塚本文と結婚。このころから本格的な作家生活を決意し、翌年に海軍機関学校を辞職、大阪毎日新聞社の社員となる。鋭利な人間観察と構成的、理知的な作風の歴史小説によって、文壇の流行作家となった。十年に上海、南京、北京など四か月間にわたり中国各地を旅行。この旅で健康を害し、心身の不調に悩まされるようになる。これ以後、作風の変化、現代小説への転換が進んだ。大正末年から、身体の変調、相次ぐ身辺のトラブル、時代の変化への不安などに悩まされて神経衰弱が悪化し、創作活動の低調に苦しみながら、人生への絶望感が色濃い晩年の作品群を残し、昭和二年七月二十四日未明、「ぼんやりした不安」の一句を遺書中に残して服毒自殺した。

文学活動

文学史的に大正期を代表する作家の一人として、第三次、第四次の「新思潮」同人であったことから〈新思潮派〉、作風から〈新技巧派〉〈新理知主義〉〈新現実主義〉の名で呼ばれる。作家生活は大正五年の文壇登場から昭和二年の自死に至る十余年の期間であるが、初期を含む前期では、歴史に題材を借りて、緻密で理知的な構成により、近代的な人間心理の観察を専らにして、人間性の内奥に潜む本質をえぐり出そうとする歴史小説の試みが見られる。「羅生門」（大四）「鼻」（大五）「芋粥」（大五）「地獄変」（大七）など、古典の説話物語を素材にした〈王朝物〉の作品を中心に、他に「奉教人の死」（大七）「きりしとほろ上人伝」（大八）などの〈切支丹（きりしたん）物〉、「開化の殺人」（大七）「舞踏会」（大九）などの〈江戸物〉、「戯作三昧」（大六）「枯野抄」（大七）などの〈開化物〉と作品は広範囲に及ぶ。また「地獄変」「戯作三昧」などは、芸術的完成に賭ける〈芸術派〉の作品と見ることができる。後期は現代小説が中心になる。既に「蜜柑」（大八）「秋」（大九）などが書かれていたが、大正十年の中国旅行以後、作風に転換が見られ、「保吉の手帳から」（大十二）など身辺に取材した一連の〈保吉物〉が書かれる。自伝的作品「大道寺信輔の半生」（大十四）に続き、「点鬼簿」（大十五）の痛切な自己告白（「僕の母は狂人だった」）がなされた。最晩年の作品には、

人生への絶望、死の予感、狂気への傾斜が著しい。「玄鶴山房」（昭二）「蜃気楼」（昭二）「河童」（昭二）が書かれ、遺稿として「歯車」（昭二）「或阿呆の一生」（昭二）がある。また、芥川の別の優れた一面として「蜘蛛の糸」（大七）「杜子春」（大九）などの児童文学の作品がある。俳人としても一家をなす。

作者を解くカギ

芥川龍之介というと、自殺と晩年の作品の影響から、とりわけ眼光だけが異様に鋭い頬のこけた写真の印象から、神経質で陰鬱なイメージでその生涯が見られてしまう。「羅生門」が暗く陰惨な救いのない物語という傾きで論じられてきたのは、この印象が強い先入観となっていたからではないだろうか。実質的なデビュー作とされるこの作品の背景に、吉田弥生という女性との恋愛が家族の反対によって挫折し、人間のエゴイズムの醜さを痛感した個人的事情が指摘されているのも、この暗さを補強するための証拠固めというきらいがある。だが、「今昔物語集」の野趣の発見の一事でも明らかなように、文壇への野心を秘めた青年芥川の荒々しい創作意欲がこの処女作に込められていることを見落としてはなるまい。老婆を蹴倒す下人に因習的な世俗道徳に反逆する若き芥川の姿を読む説（関口安義）はその意味で十分に根拠があるかもしれないし、大杉栄やベルクソン、さらにはリッケルトやランプレヒトなどの同時代思想との相関性は見逃せない。そして多くの外国文学からの影響ばかりでなく、森鷗外や夏目漱石（鷗外にはすでに面会していたが、漱石には「羅生門」執筆後）、北原白秋、木下杢太郎、さらには武者小路実篤や志賀直哉など、同時代を先に進む作家や詩人との作品を通じた影響関係も多々指摘されている。

「羅生門」を男が何者かになる物語と捉えたとき、創作に人生を賭す覚悟を固めた芥川の作家精神の初心に触れうるのではなかろうか。それは、〈新技巧派〉〈新理知主義〉〈新現実主義〉の名で呼ばれ、虚構の彫琢に賭ける芸術至上主義と明敏な近代的知性による人間観察という文学史的記述では覆えない人間としての芥川を知ることに通じるかもしれない。それは読書行為に付随する一つの幻想に過ぎないかもしれないが、好悪が分かれるにせよ、青少年期に一度は作家というプリズムを通した読書体験をしておくことが、今後の書物や諸学・諸芸との付き合いを豊かにする可能性を高めるように思われる。

出典

本文は「芥川龍之介全集」第一巻（岩波書店　平七）によった。初出は雑誌「帝国文学」（大四）。署名は柳川隆之介。第一短編集「羅生門」（大六）に、多少訂正を加えて収録。さらに、作品集「新興文芸叢書８・鼻」（大七）に収録する際、末尾の一文を含むかなりの改訂がなされ、以後定稿とされた。「羅生門」は発表された作品では第四作に当たるが、芥川文学の特質を示した実質的なデビュー作であり、作者の愛着の深かった作品である。ただし、同様に「帝国文学」に掲載された「ひよつとこ」（大四）や、さらに習作期の作品に遡ることで見えてくる芥川文学の多面性もあるので、適宜参照したいところである。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、現代仮名遣いに改めるとともに、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「思はぬよ。」→「思はぬぞよ。」（教科書一九二・１）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

○作品注釈・読解・鑑賞

「日本近代文学大系38　芥川龍之介集」吉田精一編　角川書店　昭四十五

「鑑賞日本現代文学11　芥川龍之介」海老井英次編　角川書店　昭五十六

○「羅生門」の作品論

「『羅生門』論」（「芥川龍之介１　特集羅生門」所収）海老井英次　洋々社　平三

「『羅生門』を読む」関口安義　三省堂　平四

「日本文学研究資料新集19　芥川龍之介」宮坂覺編　有精堂　平五

＊特に以下が参照すべきものである。

・「媒介としての門　『羅生門』研究」松本修

・「座談会『羅生門』を読む」三谷邦明・田近洵一・関口安義・鈴木醇爾

・「初期芥川竜之介の世界」関口安義

・「『羅生門』の異空間」平岡敏夫

・「下人が強盗になる物語」杉本優

「芥川龍之介『羅生門』作品論集（近代文学作品論集成４）」志村有弘編　クレス出版　平十二

「芥川龍之介作品論集成第１巻　羅生門　今昔物語の世界」浅野洋編　翰林書房　平十二

「「羅生門」の誕生」関口安義　翰林書房　平二十一
「芥川龍之介『羅生門』　「羅生門」精読―「下人の行方は、誰も知らない」と書く「作者」」石川巧
「日本文学」平二十八・四
「「羅生門」の世界と芥川文学（阪大リーブル66）」清水康次
大阪大学出版会　平三十一

○作家論・作品論

「芥川龍之介」吉田精一　三省堂　昭十七
＊「吉田精一著作集」第一巻（桜楓社　昭五十四）にも収録。
「古典と近代作家――芥川龍之介」長野嘗一　有朋堂　昭四十二
「芥川龍之介の世界」駒尺喜美　法政大学出版局　昭四十七
「芥川龍之介論」三好行雄　筑摩書房　昭五十一
＊「三好行雄著作集」第三巻（筑摩書房　平五）にも収録。
「芥川龍之介研究」菊地弘他編　明治書院　昭五十六
「芥川龍之介」平岡敏夫　大修館書店　昭五十七
「芥川龍之介と現代」平岡敏夫　大修館書店　平七
「芥川龍之介」関口安義　岩波書店　平七
「小説の力」田中実　大修館書店　平八
「〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ2」
田中実・須貝千里編　右文書院　平十一
「芥川龍之介（日本文学研究論文集成33）」浅野洋編
若草書房　平十一
「芥川龍之介とその時代」関口安義　筑摩書房　平十一
「芥川龍之介を学ぶ人のために」浅野洋・芹澤光興・三嶋譲編
世界思想社　平十二
「芥川龍之介（日本の作家100人）」海老井英次
勉誠出版　平十五
「芥川龍之介―文学空間」佐々木雅發　翰林書房　平十五
「芥川作品の方法―紫檀の机から（近代文学研究叢刊42）」
奥野久美子　和泉書院　平二十一
「芥川龍之介―「不安」の諸相と美学イデオロギー」藤井貴志
笠間書院　平二十二
「芥川龍之介―生誕120年」関口安義編　翰林書房　平二十四
「弱い「内面」の陥穽―芥川龍之介から見た日本近代文学」
篠崎美生子　翰林書房　平二十九
「小説とは何か？芥川龍之介を読む（ひつじ研究叢書（文学編）10）」
小谷瑛輔　ひつじ書房　平二十九
「芥川龍之介選　英米怪異・幻想譚」澤西祐典・柴田元幸編訳
岩波書店　平成三十
「芥川龍之介　家族のことば」木口直子
春陽堂書店　平成三十一

＊生徒用

⊙**「山椒大夫・高瀬舟」**森鷗外　新潮社　昭四十三
⊙**「夢十夜・文鳥」**夏目漱石　新潮社　昭五十一
「芥川龍之介必携」（「別冊國文学」所収）三好行雄編
學燈社　昭五十四
「芥川龍之介事典」菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編
明治書院　昭六十　＊増補版　平十三
「芥川龍之介を読むための研究事典」（「国文学」所収）

學燈社　昭六十三・五

⊙**「蜘蛛の糸・地獄変」**芥川龍之介　角川書店　平元

「フォー・ビギナーズ・シリーズ 51　芥川龍之介」
吉田和明・田島董美　現代書館　平元

「年表作家読本　芥川龍之介」鷺只雄編　河出書房新社　平四

「羅生門　蜘蛛の糸　杜子春外十八篇」芥川龍之介
文藝春秋　平九

「芥川龍之介新辞典」関口安義編　翰林書房　平十五

「芥川龍之介（日本文学コレクション）」庄司達也・篠崎美生子編　翰林書房　平十六

「文豪ナビ芥川龍之介」新潮社編　新潮社　平十六

「芥川龍之介の「羅生門」「河童」ほか 6 編（ビギナーズ・クラシックス近代文学編）」角川書店編　角川書店　平十八

「芥川龍之介短篇集」ジェイ・ルービン編／村上春樹序
新潮社　平十九

「芥川龍之介ハンドブック」庄司達也編　鼎書房　平二十七

「芥川龍之介 没後 90 年 不滅の文豪（文藝別冊）」
河出書房新社編集部　河出書房新社　平二十九

「教科書と近代文学 ―「羅生門」「山月記」「舞姫」「こころ」の世界」日本近代文学館編　秀明大学出版会　令三

主題

まず、先学の論考から主なものを要約して次に掲げる。

1　**〈生きるために各自が持たざるをえないエゴイズム〉**（吉田精一）
2　**〈善にも悪にも徹底しえない不安定な人間の姿〉**（吉田精一）
3　**〈善と悪を同時に併存させているところの矛盾体である人間そのもの〉**（駒尺喜美）
4　**〈追いつめられた限界状況に露呈する人間悪〉**（三好行雄）
5　**〈世俗の虚偽的な価値や道徳に反逆する若者の自己解放〉**（関口安義）
6　**〈濃密な恐怖の雰囲気による美的な世界の創出〉**
〈昼の世界に対する夜の世界。日常的、世俗的世界の転換をもたらす羅生門という異空間〉（平岡敏夫）
7　**〈主人と下人の関係を転倒させる物語、下人がおのが生の《主人》公となる物語〉**（杉本優）
8　**〈〈語り手〉こそ下人の生きる観念の闇というアポリアに立ち向かう〉**（田中実）
9　**〈排除という秩序維持の機構を下人が相対化しあぶりだす「物語」〉**（篠崎美生子）
10　**〈語り手〉の〈意図のもとに出来事を語るという試みを貫徹することの限界を示す〉**（小谷瑛輔）
〈闇を語るという行為が抱え込まざるを得ない死角そのもの〉（石川巧）

主題は作者の意図と考えられるものとする立場から、往々にして「作者はこの小説で何を書こうとしたのか」という形で問われる。だが、作者の意図がそのまま作品に反映するほど虚構の創造は単純ではない。書き上げられた作品は作者を置き去りにして生きる。実際に書き上げられた作品について作者の注解があるとしても、それは多くの読み手の注解の一つにすぎない。授業では、主題を「作品の中心となる思想内容」と解すれば十分である。作品からくみ取れる「人間」や「人間にかかわる世界」（社会、自然など）の「あり方」についての中心的な考えを、指摘できればよいのである。中心的といっても唯一の正解があるわけではないことは、前述の要約を見るだけで十分に了解されることである。

授業展開を終えて、構成的に要約すると次のようになろう。

「盗人になる」ことにためらいがあった下人が、荒廃の羅生門楼上で老婆の「死者の髪を抜く」行為を目撃し、憎悪に駆られて老婆を捕らえるが、その老婆の「生きるためにしかたがなくしたことは許される」という弁明を聞いて、果断に「盗人」となって闇の彼方に去ったという出来事（を語る「作者」の誕生）。

ここから取り出しうる事柄を五十字ほどで要約してみる。

まず、契機を得て変わりうる人間の物語ととれば、

a　躊躇から決断、実行へ、という行動心理の側面で、

1　**人間は行為の正当化の口実を得たとき、初めてためらいを断ち果敢に実行に踏み出すことができる。**

2　**自己決定の逡巡を突き破るには、人間は他者の行為と言葉**

による保証の契機を必要とする。

また、行為の善悪を前面に置いて捉えるなら、

b　善悪の価値判断という側面で、

3　生きることを第一義とする限り、善悪を取り立てても意味はない。

4　善悪の範囲も濃度も相対的であり、立場や見方が変われば評価は一変する。善悪の判断に絶対的な根拠はない。

さらに、人間存在の特質に焦点を合わせると、

c　人間の宿業という側面で、

5　どんな行為も正当化せずにはいられないし、合理化できてしまうという言葉の戯れに生きる人間のあり方。

6　どんな行為にも必ず善悪の判断を加えずにはいない倫理的な存在である人間の特質を逆説的に証明する。

7　他者を拒絶し、その場の情動に左右されて自己中心的に行動する若者の空虚さ。

8　自己の行為の意味を突き詰めず、現実にしがみついて生きるだけの人間の生の実相。

9　人間は他者との関係の中で不確かに揺れ動く自己を抱えながら、自己の生を導いている。

d　創作を現在において展開する「作者」に焦点を合わせると、

10　古典作品や歴史的背景を自由に再構成して近代的な小説を創造する、寄る辺ない「作者」の誕生を描いている。

古いものや些細なものが捨てられ、すべてのものが進歩し、新しくなることが人間にとって常に良いこととは限らない。失ってからはじめて気づくようなものの中にこそ、かけがえのない、自分自身を確認する契機がある。

構成

構成1

羅生門の舞台と下人の動きを場面を中心に捉え、短編小説の典型として、全体を「起・承・転・結」の四段落に分かつ。

段落	ページ・行	段意
第一段	**「門の下」雨宿りの段** 初め～ P一八六・5〈そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。〉	**1節**（初め～P一八三・16）ある日の暮れ方、一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。打ち続く京の災害のために、羅生門の荒廃も著しい。 **2節**（P一八三・1～P一八五・10）主人から暇を出され、行き所のない下人は、飢え死にを避けるには、盗人になるよりほかにしかたがないと思案しながら、それを肯定する勇気が出ずにいた。 **3節**（P一八五・11～P一八六・6）下人はともかくも夜を明かそうとして、羅生門の上へはしごを上りかけた。
第二段	**「はしご」楼内うかがいの段** P一八六・7〈それから、何分かの後である。〉～ P一八九・9〈とうに忘れているのである。〉	**1節**（P一八六・7～P一八八・3）楼の上で、誰かが火をともしていた。下人ははしごを慎重に上り、楼の内に無造作に捨てられた幾つもの死体を見た。そのとき下人に死体の臭気を忘れさせるほどの衝撃が走った。 **2節**（P一八八・4～P一八九・9）死骸の中に一人の老婆がうずくまっていた。老婆は女の死骸から髪を抜き始めた。見つめる下人の心にあらゆる悪への激しい憎悪が燃え上がり出した。
第三段	**「楼上」老婆捕らえの段** P一八九・10〈そこで、下人は、両足に〉～ P一九二・4〈大体こんな意味のことを言った。〉	**1節**（P一八九・10～P一九〇・15）飛び出した下人は逃げる老婆を取り押さえた。無力な老婆を前に下人の憎悪は冷め、得意と満足を味わう。下人は老婆に何をしていたと尋ねる。 **2節**（P一九〇・10～P一九〇・15）髪を抜いてかつらにするという、老婆の存外平凡な答えに下人は失望を感じ、憎悪と侮蔑の心が動いた。老婆は、生きるためにしかたがなくする行為は悪とは思わないと弁明する。
第四段	**「楼上」引剝ぎの段** P一九二・5〈下人は、太刀を鞘に収めて〉～ 終わり	**1節**（P一九二・5～P一九三・11）老婆の話を聞いていた下人の心にある勇気が生まれた。門の下では欠けていた勇気である。下人は「俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」と言うやいなや、すばやく老婆の着物を剝ぎ取ると、はしごを駆け下りた。しばらくして起き上がった老婆が門の下をのぞき込むと、外には、黒洞々たる夜があるばかりであった。 **2節**（P一九三・12）下人の行方は、誰も知らない。

構成2

下人の心理の変化と連続を中心に捉えて、下人の行動との関連で、次の四段に分かつ。

第一段	「門の下」で座りながら、思案している場面の心理（初め～P一八五・10）
	1節 羅生門の状況（初め～P一八三・16） **2節** 考えあぐねる（P・一八四・1～P一八五・10）
第二段	「門の下」で立ち上がってから、「はしご」の上段で楼内の様子をうかがう場面までの心理（P一八五・11～P一八九・9）
	1節 寝場所を探す（P一八五・11～P一八六・6） **2節** 人の気配に気づく（P一八六・7～P一八七・16） **3節** 激しい憎悪を抱く（P一八八・1～P一八九・9）
第三段	「楼上」で老婆を捕らえてから、その話を聞く場面までの心理（P一八九・10～P一九二・12）
	1節 満ち足りた思い（P一八九・10～P一九〇・15） **2節** 期待はずれ（P一九〇・10～P一九二・4） **3節** 考えが固まる（P一九二・5～12）
第四段	「楼上」で老婆に対して引剝ぎをして、立ち去る場面の心理（P一九二・13～終わり）
	1節 非情に剝ぎ取る（P一九二・13～P一九三・11） **2節** 行方不明（P一九二・12）

この構成の下で、下人の心の動きを逐次的に追ったものが、次の表組である。

場所	段落	様態	下人の心理（心の動き）	下人の行為・状況
門の下	第一段	漠然	「大きなにきびを気にしながら」 「ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」	日暮れ、羅生門の下 雨やみを待つ
		思案	途方に暮れる ← とりとめもない考えをたどる 「（飢え死にを避けるためには）手段を選んでいる暇はない」 「選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがない」 ← ためらい 「積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた」	失職による生活不安 羅生門の荒廃、晩秋の日暮れから夜への推移、雨などの重苦しさが、Sentimentalisme に影響 〈陰鬱な状況下での不安〉 〈実行の不決断〉
はしご	第二段	躊躇	ともかくも、夜を明かそう 「雨風の憂えのない、人目にかかるおそれのない、一晩楽に寝られそうな所があれば」 ← 高をくくる 「人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」	迫る雨風の夜の寒さ 〈心身の疲労〉 寝るところを探す はしごを見る 〈休める場所という意識〉
		警戒	緊張　「息を殺しながら、上の様子をうかがっていた」 恐れ　「恐る恐る、楼の内をのぞいてみた」	のぼりかけて火を見る 上まではうように上る 〈予期せぬ事態への身構え〉
楼の上		衝撃	ある強い感情　「六分の恐怖と四分の好奇心」 ← 少しずつ、恐怖が消え、憎悪が動いてくる ← 激しい憎悪　「あらゆる悪に対する反感」	雨の夜、死体が転がる楼上 死人の髪を抜く老婆を目撃 〈異常な状況下の異様な光景に対する衝撃〉 情緒的、感覚的反応

楼の上 ―――― 門の下

段	第三段			第四段	
	自足／疑問	意外	契機	断行	断絶
心理	勝利者の意識「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されている」 ← 憎悪の沈静化「安らかな得意と満足」 ← 老婆の行動の訳を知りたい「何をしていたのだか、それを俺に話しさえすればいいのだ」	老婆の平凡な答えへの失望 憎悪の復活と冷ややかな侮蔑	ある勇気 「門の下で、この男には欠けていた勇気」 「老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」 ← 飢え死には意識の外	老婆への嘲り「俺が引剝ぎをしようと恨むまいな」 ← 正当化「俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」 ← 果断な行動 「すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った」 「手荒く死骸の上へ蹴倒した」 「瞬く間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた」	永遠の添「下人の行方は、誰も知らない」
	↑ ↑	↑	↑	↑ ↑ ↑	↑
行動	老婆をねじ倒す 〈勝利者の余裕〉 老婆に問う 〈行為への疑問〉	老婆の答えを聞く 〈期待外れ〉	老婆の弁明を聞く 〈口実の発見〉	老婆への念押し 老婆の論理を逆手に取る 〈口実の投げ返し〉 老婆の着物を剝ぐ 〈踏み切った一歩〉	夜の闇に消える 〈宙吊りにされた未来〉

板書例

1 第一段

最初に小説の背景と登場人物

	1	2	3	4	5
	時代	時刻	場所	季節	都の様子
説明	平安時代末期 （旧記より養和大飢饉一一八一年）	ある日の暮れ方 （明暗の視点→色彩）	京の都の羅生門（南端門）	晩秋 理由（きりぎりすと夕冷え火桶）	下人のほか誰もいない羅生門 なぜか？ 都 ⇦ 地震　辻風　火事　飢饉 結果　さびれ方は異常 （旧記より＝方丈記） 狐狸・盗人が棲む 死人（しにん）の遺棄

6

登場人物と生物

①下人…どんな人物か？　（主従関係の下）
他の人物はなし　主人に仕える下働きの人間

②きりぎりす（色彩と効果）

色彩
- 丹の円柱 ― きりぎりす
- 赤
- 緑〈秋〉

効果
- ・寂しさ
- ・唯一の有機物
- ・時間

※こおろぎ（茶）晩秋

③鴉（からす）（形象）
鴉が夕焼けの中
死人の肉をついばむ
⇦ 今日　長い草の石段の上　白い糞

項目	色	イメージ
鴉	黒	不吉 死
夕焼け	赤	血
死人の肉	赤	

緑 ↑ 対比 ↓ 白

展開（下人の外見→立体的描写→葛藤）

（1）下人（外見と心情）

外見
① 洗いざらし
- 紺の襖 ― 大きなにきび
- 清涼感 ― 青色でクローズアップ

イメージ（色）

心情
② 赤色の強調
- ・若い思春期の男
- ・悩み多い心

平安時代のサンチマンタリスム→下人の現代人的感傷癖

（2）作者はさっき「下人が雨やみを待っていた。」
作者の登場「語り」で立体的描写
謎 作者まで自由に操る「芥川」は超越者なのか？
雨やみを待つ本当の理由は？

状況の由 表理	主人に四、五日前に暇を出された（都の衰微で、失業）
真の理由	雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた

（3）下人の二つ（Ⓐ と Ⓑ）の葛藤
どうにもならないこと 明日の暮らし どうにかするため
手段を選んでいる暇はない

Ⓐ選んでいれば	結果：飢え死に（そうして）犬のように遺棄
Ⓑ選ばないとすれば	すれば　同じ道を低回したあげく この局所へ逢着（「すれば」の片をつける） 結局（　局）⇩盗人になる

下人　大きなくさめ　立ち上がった（行動の起点）
丹塗りの柱のきりぎりすも消えた（時間経過）
夜を明かすため羅生門の二階へ上がる

2 第四段 下人の変化

本文	背景
太刀を押さえ冷然	老婆を威圧しながらも、冷静・冷酷な心で対応
大きなにきびを気にして	老婆の話に共感するのではなく、違う視点（悪の実践）へ向かうきっかけ

変化

転換点①
しかし
下人にある勇気の喚起

門の下	2つの勇気
前の状況（前の勇気）	門の下で飢え死にか盗人かで迷う	老婆を捕えた勇気 あらゆる悪への反感 悪を憎む心 正義感 ＝ 勇気
ある（新）勇気の発生	Ⓐ門の下で下人に欠けていた勇気	Ⓑ老婆を捕えた勇気（正義感）とは反対
結局	盗人を積極的に肯定する 勇気	

転換点②
きっとそうか
嘲るような声で念を押した

問
⇦ どうしてか？

下人の内情	
老婆の悪の論理の実践を下人が老婆に対して行った場合、その本人が最初の被害者となる皮肉から	嘲るような声（皮肉）
悪の論理は生きるために許されることの再確認 同時 老婆自身がその被害者となることへの同意	念を押した（確認）

転換点③
では
不意に右手をにきびから離して↓初めて利き手が解放

問
⇦ にきびの象徴とは？【悪の実践の起点】

象徴	
①	悪の実践を束縛している正義感という障害（への象徴）
②	若さ・サンチマンタリスム・ストレスなどの心理的性癖（という象徴）

最後図でまとめると

京の都（羅生門外部）

羅生門の内部
老婆･･･死人（しびと）の毛を抜く
女･･･蛇を干し魚として売る

非日常的次元
死人（しびと）世界
生存の論理
⇨
生きるための全てが許される世界
＝
悪の論理

老婆

日常
京の都
死人（しにん）
白髪を逆さにのぞき込む
急なはしご

下人
下人の行方は誰も知らない
（どう地獄を生きるのか？）

夜の底
奈落の底＝地獄
黒洞々たる夜
暗黒の「無明の闇」
救済なし我欲・我執の支配
「無明の闇」無秩序・悪の支配

発問例

・「導入の問い」のねらい

自分の思う「正しさ」に疑いを持ったことがありますか。

（ねらい）高校に入学したことを機に、中学時代までとは大きく価値観が異なる集団や文化に出会うことも多いかと思われる。中学校までは、保護者や教師などの価値判断をそのまま受け容れることもあっただろうし、部活動や塾の仲間とだけで醸成された価値基準もあったのではないか。しかしそうした「正しさ」を、環境が大きく変わることもある高校一年生の感覚で問い直してみることも大切であるし、また、その根拠についてじっくり考えることがあってもよい。

●一八二ページ

問 **冒頭の二文には、この小説を読ませるうえでどのような効果があるか。**

答 時間、場所、人物の状況が提示され、以下の展開への興味が喚起される効果。「暮れ方」「雨やみ」の語が沈んだ雰囲気の印象を与え、「羅生門」「下人」の語が過去の時代を感じさせる。

補 京を舞台とする歴史小説、「日暮れ」から始まる物語、「雨やみ」を待つという受動的な姿勢などを押さえる。動ではなく静の傾きがある。

問 **「きりぎりすが一匹止まっている。」（3行目）には、情景描写としてどのような効果があるか。**

答 ぽつんと頼りなげなあり方により、①下人の孤独を印象づけ、②寂寥感を深めたり、③季節感や④色彩感などを表す効果。

補 場の寂しさや命のはかなさを一匹の虫によって象徴的に描写している点を把握させる。

問 **「この男のほかには誰もいない。」（5行目）における、係助詞「は」の働きは何か。**

答 取り立てて強調する働き。この男だけがいることを際立たせる。

補 「この男のほかに誰もいない。」（2行目）

問 **作者が「旧記」（7行目）に言及したのはなぜか。**

答 史資料を用いていることを明示して、歴史小説としての信頼度を高めるため。

補 語り手は物語の中の現在から離れ、現実の歴史上の現在の視点で、物語の外から、過去を確かめている。このことは語り手が「作者」自身であることを指示する。

問 **「仏像や仏具を打ち砕いて、……」（8行目）とあるが、このような事態は、端的にどのような状況を示しているか。**

答 生活の困窮が、人々の信仰心すら失わせるほどの、人心の荒廃をもたらしている状況。

補 単に生存困難な状況というではなく、人々の心がすさみきっている点を言う必要がある。

●一八三ページ

問 **「足踏みをしない」（1行目）とは、どのような様子か。**

答 足を踏み入れない、近づかない様子。

補 通常の用法との違いに注意する。

問 **「鴉」（3行目）の群れが飛ぶさまは、どのような印象をもたらしているか。**

答 血をイメージさせる夕焼けの赤と鴉の黒との対照による不吉さ（死）、気味悪さ。

補 視覚的な鮮やかさが一層不安をあおっている。

問 **「にきび」（15行目）の叙述を、この後の部分から三箇所抜き出しなさい。**

答 ①短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。②もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら③不意に右の手をにきびから離して

問 **「にきび」（15行目）は、どのようなことを物語っているか。**

答 下人が若く、それゆえの優柔不断さと危うい強さを持っていること。

補「にきび」は下人を特徴づける焦点化された一点。以下、作品の要所で、下人の若さそれ自体が持つ悩み多い優柔不断さと、決断したら猪突猛進する強さ、感情の揺れなどが、この一点の印象に結びつけられる。

●一八四ページ

問**◉「作者は…書いた。」（1行目）の一文には、どのような効果があるか。**

答読者が本文から読み取ってきた平安末期の「下人」の状況が、「作者」が「旧記」などを参考にして執筆しつつあるフィクションであることに注意を向けさせる。

補膨大な資料によって立ち上げられている小説世界がすべて書き手である「作者」によって操作可能なフィクションであることを早い段階で明示することで、その創作現場を垣間見ながら下人の言動も追っていくというメタフィクション構造が成立している。

問**「衰微の小さな余波にほかならない。」（5行目）とは、どのようなことか。**

答都の荒廃という時代状況の影響が下人に否応なく及んできたということ。

補個人の力ではどうしようもない事態であることを捉える。

問**「……というほうが、適当である。」（7行目）というのは、なぜか。**

答下人の状況を正確に伝えているから。

補単なる雨宿りでないことが要点。

問**「この平安朝の下人の Sentimentalisme」（8行目）という表現には、どのような効果があるか。**

答下人を、作品の舞台とは異質の、近代的な人間心理を備えた人物として印象づける効果。

補フランス語の原語表記が読者に、時代と状況のミスマッチを感じさせる異化作用として働いている。知的スノビズム（俗物主義）と反発する向きもあろう。

問**「どうにもならないこと」（10行目）とは、どのようなことを表しているか。**

答「明日の暮らし」のめどが全く立たないこと。

補生きるための方途がなく、追い詰められている状況の確認。

問**「雨は……」（13行目）「夕闇は……」（13行目）という描写は単なる情景描写にとどまらない効果を持つが、どのような効果か。**

答下人の重苦しい心の心象風景となる効果。

補追い詰められた心の不安を伝える描写である。

問**◉「手段を選んでいる暇はない。」（16行目）とは、「下人」のどのような状況を述べているか。**

答生き延びるためには、善悪の判断を超えた現実的行動を選択せざるをえないところまで追い込まれている状況。

補「手段を選ばない」とは、目的のためにはどんな手段でも実行すること。具体的には「盗人」にでも何にでもなること。瀬戸際にまで追い詰められた心理にあることが分かる。

●一八五ページ

問**◉「この局所」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答手段を選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがないということ。

補考えの筋をたどって、「手段を選んでいる暇はない」から「選ばないとすれば」という条件の部分までは、考えが絞られてきたので、「局所」の語を用いたのである。限られているのであって、全体を見渡しての判断とは受け取りづらい表現である。受けている部分はダッシュまでを含むので注意したい。

問**「あげく」（4行目）「結局」（6行目）の語源を答えなさい。**

答「あげく」は、連歌・連句（短歌の五七五の長句〔上の句〕と七七の短句〔下の句〕を数人がつないで詠み合う形式の文芸）の最終句。

「揚げ句」とも言い、初句の「発句」と対応する呼び方。「結局」は囲碁を打ち終えること。

補 両者ともゲームの終わりを意味する用語から転じて、最後、終末の意を示す。

問 **「すれば」（5行目）とあるが、「　」つきで述べているのはなぜか。**

答 現段階では仮定の段階を出ないということを強調するため。

補 論理の必然として逢着した「局所」ではあるが、心にはその後を肯定する勇気が生まれない事態の確認。

問 **『すれば』の片をつける」（7行目）とは、どのようにすることか。**

答 「盗人になる」ことを肯定すること。

問 **「勇気が出ずにいた」（10行目）のは、どういう気持ちの表れか。**

答 盗人になることをためらう気持ち。

補 なぜ逡巡するかについてまで含めた解答もあり得るが、逡巡の理由を限定することは困難である。ただ、さまざまな理由をあげることは読みを広げ深めることになろう。

問 **「大きなくさめ」（11行目）は下人のどのような状況を表しているか。**

答 吹きさらしの石段に座り続けて、雨の夜の寒さが身に迫って来た状況。

補 晩秋の雨の夜、座って思案に暮れていた間の時間の経過も読み取れる。

問 **「大儀そうに立ち上がった」（11行目）のはなぜか。**

答 一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったから。

問 **「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」（14行目）という記述には、どのような効果があるか。**

答 夜の深まりという時間的経過と一層の寂しさを感じさせる効果。

補 時間の経過を示し、寂寥感、孤独感をさらに増している。

●一八六ページ

問 **「どうせ死人ばかりである。」（4行目）というのは、下人のどのような気持ちの表れか。**

答 「人目にかかる」よりは、死人と一緒にいるほうがましだ、面倒がなく気楽だ、という気持ち。

補 「盗人になる」ことを考えていたことの負い目、心身の疲労で早く休みたい気持ちが、人に煩わされたくない思いを生んでいる。

問 **「聖柄の太刀」（4行目）は、下人にどのような印象を加えているか。**

答 力強く、精悍な印象。

補 ここに至って初めて、太刀を帯びた若い男というイメージが浮かび上がる。

問 **◉「一人の男」（7行目）とは、誰か。また、このような表現をしたのは、なぜか。**

答 「一人の男」とは下人を指し、①新たな場面転換を印象づけると同時に、②緊張感（サスペンス的感覚）を与えるためにこのような表現をした。

補 第三者的に客観化した視角で下人を描くことによって、一瞬、第二の人物の新登場であるかの錯覚を与え、緊張感を生んでいる。改めて下人に着目させる手法である。

●一八七ページ

問 **「にきび」（1行目）のここでの効果は何か。**

答 男が下人であることを指示する効果。

補 再び「下人」と呼ぶための仲立ちの役割。

問 **◉「それ」（4行目）は、どのようなことを指しているか。**

答 誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしいこと。

補 直前の「その濁った、黄色い光が、……映ったので」と理由の提示があるのがヒントとなる。

問 **「この雨の夜に、この羅生門の上で」（5行目）とは、どのような状況を表しているか。**

答 死体置き場となった羅生門が、常人の近づくはずのない異常で不気味極まる場所となっている状況。

補 羅生門の上が、下人に日常世界と隔絶した空間として把握されていることを見る。

問 **火を「とぼす」（2行目）「ともす」（5行目）の二つの語と同様の例をあげなさい。**

答 「さびしい」「さみしい」、「けぶり」「けむり」、「とぶらい」「とむらい」など。

補 バ行とマ行の相通現象。

問 **「やもりのように足音を盗んで」（6行目）とは、どのような様子を表しているか。**

答 気配を消して足音を立てずに闇をはう様子。

補 「やもり」の比喩と「足音を盗む」の意味に注意する。

●一八八ページ

問 **◉「ある強い感情」（2行目）とは、具体的にはどのようなことか。**

答 「六分の恐怖と四分の好奇心」（8行目）。

補 死骸の中にうずくまっている人間を見たという、予想外の異常な事態に対する恐ろしさ（頭身の毛も太る）と、その不思議さへの衝撃的な驚きである。

問 **「檜皮色の着物を着た」（4行目）「背の低い」「痩せた」「白髪頭の」「猿のような」（5行目）と修飾語を畳みかける表現は、下人のどのような様子を表しているか。**

答 一気に老婆に関心が集中しながら、衝撃のために次々に断片的に特徴をつかむことしかできない様子。

補 下人が恐怖と好奇心に駆られて老婆の姿を何とか確かめようとする様子である。

問 **「頭身の毛も太る」（9行目）とは、どのようなことか。**

答 身の毛がよだつこと。異常な恐ろしさの形容。

問 **「恐怖が少しずつ消えていった。」（13行目）のはなぜか。**

答 刺激に慣れるに従って恐怖心から髪の毛の抜け方に関心（好奇心）が移っていったから。

補 16行目の一文に着目する。

問 **◉「激しい憎悪」（14行目）とは、どのようなものか。**

答 死人の髪の毛を抜くという行為に対する衝動的、感情的、生理的な拒絶反応から生まれる怒り。

補 「反感」（16行目）の語からも、この憎悪が「合理的」なものではなく、感情的、反射的なものであることが分かる。

問 **作者は、「語弊がある」（16行目）でどのようなことを述べようとしているか。**

答 下人が抱いた感情は「老婆に対する激しい憎悪」ではなく、むしろ「あらゆる悪に対する反感」であるということ。

問 **「一分ごとに」（16行目）という表現からどのようなことが読み取れるか。**

答 数分間見つめていて、その過程で「憎悪」が次第に増していくという心の変化が起こったこと。

補 「六分の恐怖と四分の好奇心」の「分」と比べて、「分」の意味をはっきりさせる。

●一八九ページ

問 **「合理的には、……知らなかった。」（6行目）とは、どのようなことか。**

答 老婆の髪の毛を抜く行為が不可解なるがゆえに、論理的に善悪を判断できなかったということ。

補 「合理的」は論理的に筋道を立てて理解するしかたの意。

問 **◉「それだけで」（7行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ（だけで）。

補 「それ」が指す具体的な事態は、「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」である。「だけで」の限定は、行

為の善悪を判断する根拠と判断のしかたを意味する。行為の善悪の判断が、合理的な根拠を欠いたまま、その場の雰囲気に左右されて理屈抜きで、情緒的、感覚的になされる、ということである。

●一九〇ページ

問 **「言わぬと、これだぞよ。」（2行目）の「これ」とは、どのようなことを指しているか。**

答 刀で切り捨てること。

補 次行の「太刀の鞘を払って」云々とある点に気づかせる。

問 **老婆が「両手をわなわな震わせて」（9行目）いるのを見て、下人はどのような気持ちになったか。**

答 ある仕事をして、それが円満に成就したときに味わう、安らかな得意の気持ちと満足な気持ち。

補 憎悪の気持ちは消えており、下人の抱いた正義感は、すぐ冷めてしまうような衝動的な正義感であったことが分かる。

問 **「肩で息を切りながら」（6行目）とは、老婆のどのような状態の描写か。**

答 驚きと恐怖のために、苦しそうに、肩を上げ下げして呼吸をしている状態。老醜を表す描写。

問 **◎「この意識は、……冷ましてしまった。」（9行目）とあるが、なぜか。**

答 恐怖におののく老婆の生死を完全支配した下人の優位性によって、憎むべき対象として感じられなくなったから。

補 下人の悪を憎む気持ちは、自分の了解を超えた異常事への衝動的、感情的な反応にすぎなかった。老婆に対する自己の優越を意識して、感情の過度の高ぶりはその対象を見失ったのである。

問 **「ある仕事をして、それが円満に成就した」（10行目）とあるが、ここでの「ある仕事」とは、具体的にどのようなことか。**

答 許し難い悪人を取り押さえること。

補 困難極まる使命を見事成し遂げた英雄的行為という思いに浸る下人の心理。

問 **◎わざわざ「役人」であることを否定して、「旅の者」（13行目）と名乗ったのは、なぜか。**

答 自分を満足させた行為について、秩序を守るための正当なものに擬えたうえで、盗人になろうとした過去を隠しつつ、老婆に捕えられる心配がないことを示し、詳しい事情を物語らせようと思ったから。また、主人から暇を出された失職の身だと本当のことも言えず、また、今、この羅生門にいることへの負い目もあったから。

補 「少し声を和らげて」とある下人の意図を考える。

●一九一ページ

問 **老婆の目、唇、喉、声の描写は全体としてどのような印象を与えるか。**

答 まだ油断できない得体の知れない薄気味悪さに包まれた印象。

補 無力に捕らえられたとはいえ、安心できない得体の知れなさがある。比喩の効果的使用にも注意。

問 **◎「平凡なのに失望した」（6行目）のは、なぜか。**

答 老婆の行為の動機が、自分の正義感や悪を憎む心に見合わないものだったから。

補 期待と結果との落差が生む失望。悪の光彩を放っていた老婆の行為は、あまりにも現実的で卑小な動機による凡庸な行為へと色あせてしまう。老婆の行為のその動機が、自分の正義感や悪を憎む心には、見合わないものだったのである。

問 **「前の憎悪」（6行目）とは、どのような憎悪か。**

答 「死体の髪を抜く」という「悪」の行為への憎悪。

補 同じ対象への憎悪であるから、「前の」と指示されているが、内容としては、「異常な悪」への怒りの憎悪から、「つまらぬ悪」への侮蔑の憎悪へと、対極化している。また、論理的、合理的な判断から出たのではなく、その場の気分に従う感情的な心の動きという点では同じ傾向を示している。

問 「その気色」（7行目）とは、どのようなことを言っているか。

答 心に老婆に対する「失望」「憎悪」「侮蔑」の気持ちが生じたと感じられる下人の様子。

補 「気色」は態度や表情に表れた心の状態。下人の表情や態度に微妙な変化が起こったのである。

問 「片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり」（8行目）という描写から、何が読み取れるか。

答 手に入れたものをあくまで手放すまいとする老婆の執念。

補 老婆の行為が生きるための切実さに基づいていることを明らかにする描写である。

問 老婆が「なんぼう悪いことかもしれぬ。」（10行目）と言いながら、後で「わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。」（一九二ページ・1行目）と言う根拠は、どのような科白に示されているか。

答 「せねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。」

補 生きるためにしかたがなくすることになった自分の行為は悪ではないという論理。

●一九二ページ

問 ⊙「大体こんな意味」（4行目）とあるのは、なぜか。

答 老婆の論理の要点を二点に絞ってまとめると、①悪には悪で報いてもよい、②生きるためにしかたなくした行為は悪ではない、となる。下人は、女の死体から髪の毛を抜く理由を必死に詳細に語る老婆の心情には関心がなく、自分に都合のいい箇所以外は聞き流しているかもしれないから。

補 老婆の自己弁護のための論理であることを確かめる。

問 ⊙「この男には欠けていた勇気」（8行目）とは、どのような勇気か。

答 盗人になることを積極的に肯定する勇気＝果断に悪を選択し、実行する勇気。

補 「さっき門の下で」とは、『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。」（一八五ページ・8行目）とある箇所を指す。

問 ⊙「この老婆を捕らえたときの勇気」（9行目）とは、どのような勇気か。

答 悪の所行を断じて許さない勇気＝悪を憎み懲らそうとする勇気。

補 「あらゆる悪に対する反感」（一八八ページ・15行目）から発した勇気を指す。

問 「そのとき」（11行目）とは、具体的にはどのようなときか。

答 下人の心に「ある勇気」が生まれてきたとき。

問 「飢え死になどということは」（11行目）「意識の外に追い出されていた。」（12行目）のはなぜか。

答 心の中で「盗人になる」（悪に踏み切る）決断を下してしまったから。

補 老婆の論理をてこにして、「盗人になる」ことへの迷いを振り切っている。

問 「きっと、そうか。」（13行目）と念を押すのは、何を確認するためか。

答 老婆の論理が間違いなく語られたとおりのものであること、さらに、老婆自身が自分の論理を正しいと確かに信じていること。

補 下人が老婆に対して「引剝ぎ」をする決心をしているところから出た言葉である。

問 「嘲るような声で」（14行目）というのは、ど

のようなことへの嘲りの気持ちを表したものか。

答 老婆の論理が、下人による老婆自身への「引剝ぎ」の実行に、立派な口実を与えてしまうものであると同時に、最初の被害者が皮肉にもその論理を教えた老婆であること。

補 老婆の論理は、下人が迷いを断ち切り、「盗人になる」決断をする格好の口実になるだけにとどまらず、その実行の手始めに老婆に対して「引剝ぎ」を行うことまでも正当化する口実を与えるものである。下人による生きるための老婆への加害を、老婆は許さなければならないという皮肉。

●一九三ページ

問 **◎「では」（1行目）は、どのような内容を受けているか。**

答 老婆の論理の内容、すなわち、飢え死にをしないためにしかたがなく悪事を働いても、それは悪とは言えず許されるものである、ということ。

補 老婆の論理の骨子を再確認させる。

問 **下人が老婆の着物だけを剝ぎ取って去ったのは、なぜか。**

答 下人にとって「盗人」へと踏み出すこと（悪へ踏み切ること）が行為の意味（目的）だったから。

補 主典拠の「今昔物語集」では、老婆の着物のほかに老婆の抜いた髪、死人の着物まで奪っている。作者の創作意図による変更である。初体験のために落ち着きを失って慌てたというのは、下人の確信の強さと老婆との力の差から見て不自然である。

問 **「夜の底」（5行目）の「底」はどのような視線からの描写か。**

答 羅生門の楼上から下の深い闇へと注がれた視線。

補 舞台の情景であり、同時に象徴的な意味を持つ表現であることにも注意する。

問 **「下人の行方は、誰も知らない。」（12行目）という結びは、初出の「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」と比べて、どのような表現効果を生んでいるか。**

答 その後を不明とすることで、下人の運命が限定された方向づけから自由になり、深い謎に包まれたものとなる効果。それにより、個々の読者の想像力が刺激される。

補 推敲の努力が生かされた結末の意図を捉える。断絶感や余韻が生まれるという漠として抽象的な言い方は避けたいが、読者によっては詩的効果が生まれる可能性もある。

語句の研究

●一八二ページ

1ある日の暮れ方のことである。　「ある日」という書き出しは、物語的、説話的発語であるが、近代小説としての冒頭の重みは、「暮れ方」という語の方にある。「暮れ方」は昼と夜の〈境界〉、光から闇への移行の時、日常世界の変容に出会う〈逢魔が時〉を指示して、以後の展開を促す。

1一人の下人　ここで「一人」は「或る」の意だが、後に（P一八二・3、6）繰り返しで語られる「この男のほかに（は）誰もいない。」によって、「一人」が「独り」と読み替えられる意味を潜在させている。「下人」は、主に仕えて下働きをする身分の低い男。

1羅生門　本来「羅城門」と書くが、近世以降「羅生門」と慣用化されていった。「羅城」は城（都）を羅（めぐ）りおさえるという意味。「羅生」は「生を羅（かいかつ）る＝生の実相を究める」を含意させるために採用された表記であろう。朱雀大路の南端に位置し、平安京の玄関口となる轍ぶき、二重閣、朱塗りの総門である。洛中洛外を区切る〈境界〉であり、作品では、地上と楼上を舞台として、生と死の交錯、日常世界と非日常世界の転換を促す〈門〉の役割を持つ。

キー・ポイント　「日暮れ」と「羅生門」　物語は「日暮れ」に始まり、「黒洞々たる夜」に終わる。また「羅生門」の門下から始まり、楼上へ舞台を移した後、門下へ戻る場面で終わる。時間的、空間的な〈境界〉が光と闇、静と動、生と死、善と悪、日常性と非日常性などの対比を際立たせて、変容の舞台となる。

3きりぎりす　原文は「蟋蟀」に「きりぎりす」とルビがある。人気のない雰囲気を強め、男の孤独感にふさわしい。古典のキリギリスは現在のコオロギだが、コオロギなら「夕冷え」とともに晩秋の寂しさにふさわしく、キリギリスなら「丹塗り」の柱との色彩の対比でただ一匹の印象が強まる。荒廃した無機質な円柱と有機物のきりぎりすとの対比から寂寥感を強調している。

3朱雀大路　平安京の中央大路であり、本来人通りがにぎやかな街路。

4市女笠　平安時代以降、上流女子の外出用のかぶり物。ここは、それをかぶった女を指す換喩法の表現と対比して「は」のあるなしの強調の度合いの差を考える。反復したうえで念押しをする対応の妙を指摘する。

4揉烏帽子　貴族の男子の平常服の折のかぶり物。「市女笠」と同じく換喩法でそれをかぶった男を指す。

4それが、この男のほかには誰もいない。　「それが」は予想に反する意を示す接続詞。「この男のほかに」は三回反復される。「この男のほかに誰もいない」（P一八二・2）「この男のほかにも……ものである。」（P一八二・3）とあり、ここで念押しする。人気のない羅生門に、この男のいることの異常を指摘し、物語の非日常性を強く指示する表現。

6この二、三年　平安末期を指す。

7旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて　真実性を強めるための表現。鴨長明の「方丈記」第五段の養和年間（一一八一年）の大飢饉を叙した一節がそれに当たる。仏像仏具の破壊は、信仰心すら失せた末法の世の荒廃を示し、規範の喪失、価値の転換という面から作品世界の展開を支える意味を持つ。

12日の目が見えなくなると　ここでは暗く

なると、の意。「日の目」は、日の光、太陽光線。普通〈日の目を見る〉は、世に埋もれていた物事が初めて世間に知られる意。

●一八三ページ

1 足踏み　ここは、足を運ぶ、足を踏み入れる意。

7 それがごまをまいたように、はっきり見えた。　「ごまをまいたように」と眺める視線は、空を覆う「夕焼け」に包まれた羅生門のシルエットを距離を置いて浮かび上がらせる位置からのものであろう。死人の肉をついばみに来て、流れ出る血の色のイメージを喚起させる赤い「夕焼け」と死者の使いを暗示させる黒い「鴉」の群れは羅生門のたたずまいに不気味な感じを加えている。

10 刻限が遅いせいか、一羽も見えない。　刻限の他に雨のせいもあろう。人はおろか鴉さえ不在の「この雨の夜に」（P一八九・7）、男が一人いる特異さが際立つ。

13 七段ある石段　羅生門の石段は実は五段である。後の小説「偸盗」（大六）では正しく五段となっている。七段が羅生門の規模にふさわしいと考えたのかもしれない。

14 紺の襖の尻を据えて　「襖」は宮中武官の礼服の腋わきのあいた袍ほう、また公家の常用服の「狩かり襖あお」（裏をつけた狩衣）を指すこともあるが、帯刀と共に庶民にはふさわしくない。当時、一般の普段着であった袷あわせ、裏をつけた上着のことであろう「尻」は着物の場合、後部に垂れた裾をいう。「襖の尻」を石段に敷くように座ると取れる。「尻」を身体部位ととれば、「襖」を着ていて腰を下ろす様子である。

15 大きなにきびを気にしながら　下人がまだ若く、その心の動きや行動に若さゆえの振れ幅があることを予想させる。

キー・ポイント　にきび　「にきび」の表現は、他に「赤くうみを持ったにきびのある頬である。」（P一八六・9）、「もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら」（P一九二・6）、「不意に右の手をにきびから離して」（P一九二・15）と、四箇所ある。他の身体の特徴の描写を省き、主人公をこの一点で印象づける。若い男の生臭さ、精神や行動の危うさ、感情の振れ幅などを感じさせる。

「王朝時代の人間にも、にきびのないこともあるまいと云う、謙遜すれば当推量によったのであるが、その後『左経記』に二君とあり、（略）今日のにきびであることを知った。」と作者は語っている（「澄江堂雑記一」）。

16 ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。　再び冒頭の「雨やみを待っていた」下人の現在に言及することで小説の語りを一区切りさせ、次の展開を呼び出す描写である。

●一八四ページ

13 作者はさっき　「語り手」が「作者」であると表明することで、「作者」の視点から物語られることを読者にはっきり示す。語り手の視点から作品世界を一元的に把持し、状況を説明したり、登場人物を外から眺めたり、また、その内面に踏み込んで心理を分析したり、意見や評価まで表明するのは、すぐれて近代小説的な手法である。

キー・ポイント　「語り手」＝「作者」　小説の「語り手」が作者とは限らないことを先に確認し（猫が語る例、作者とは違う「わたし」が語る例など）、羅生門の「語り手」の特徴を考える必要がある。

羅生門では「作者」が語り手であることを表明している。「さっき、……と書いた」（P一八四・1）、「前にも書いたように」（P一八四・3）と語り、「旧記によると」

（P一八二・7）、「旧記の記者の語を借りれば」（P一八八・9）と旧記に言及する。この語り手は作品の中の現在を語りながら、思い出したように作品の外に出て〈書いている自分〉を読者にアピールする。例えば、「この男のほかに誰もいない」と語る際、語り手は〈作中の現在〉の時間に沿っている。ところが「旧記によると」と語ったとき、この語り手は、この作品を書きつつある〈現在〉から、旧記に言及している自分の姿をあらわにする。作品の外の、現実の歴史の一時点から作品に介入して語ることで、自分の語り（＝記述）の真実性を現実に残された文献で保証しようとする知的なたくらみが見える。「作者はさっき」云々と語る場合はもっと露骨である。読者は作者の視点に同化させられて下人を中心にした物語を読まされるわけである。意地悪く見れば、正確な語り（記述）を心がけるそぶりの裏に、読者に書く自分を印象づけようとする気負いを読み取ることもできる。Sentimentalisme というフランス語の使用にもこれに通底する傾きがある。

3 その主人からは、四、五日前に暇を出された。

主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ラセウモンニノボリテシニンヒトヲミルトヌスミビトヲカタルコト）」では「摂津（ツ）ノ国辺（ノホトリ）ヨリ盗（ヌスミ）セムガ為ニ京ニ上（ノボリ）ケル男」となっていて、初めから盗人として上京した設定である。小説では、「盗人になること」を選ぶことが主要な動機（モチーフ）であり、「四、五日前に暇を出された」とすることで、下人の追い込まれた状況がはっきりする。

4 この衰微の小さな余波　「衰微」は、衰え弱ること。京都全体の社会状況を指す。「余波」は物事の及ぼす影響。不況下の失職という個人の力では抗し難い成り行きが、社会の片隅に生きる下人にも及んだ事情を言う。解雇の事情は語られていないが、下人に特に不始末があったのではないと考えてよいであろう。主典拠の「今昔物語集」にはない設定で、主人公が京の町から来たと取りうる記述。（これには異論もある。）

8 そのうえ、今日の空模様も……下人の Sentimentalisme に影響した。

「Sentimentalisme」（フランス語）は、感傷癖、物事に感じやすく感情が刺激されやすい傾向。「そのうえ」とあるのは、失職に加えて、雨も下人を羅生門にとどめて、下人の Sentimentalisme を深めるからである。

キー・ポイント　Sentimentalisme　情緒的反応に走りがちな下人という設定は、後に老婆の行為を「許すべからざる悪」（P一八九・8）と決めつける行動を見るうえでも重要。「平安朝の下人」にフランス語の表記をそのまま用いたのは、この作品が歴史小説の体裁の下に、近代的な人間心理を中心に描く小説であることを物語る。知的ハイカラ趣味とも見えるが、翻訳不可能なニュアンスを生かそうとしたのであろう。

9 申の刻下がり　今の午後四時過ぎ。「下がり」は、その刻限を少し過ぎたことを言う。「申」は動物の比喩「猿のような老婆」（P一八八・5）を導き出す伏線。さらに、十二支の順で言えば次の「酉（トリ）」へとつながり、「鶏の脚のような」（P一九〇・3）を呼び込む効果があると思われる。

10 どうにもならないこと　「衰微の小さな余波」の結果、「明日の暮らし」も成り立たないまでに追い詰められた状態。

10 とりとめもない考え　終わりがなく、まとまりのない考え。後の「何度も同じ道を低回した」（P一八五・4）考え。

11 聞くともなく聞いていたのである。　「と

りとめもない考え」に心を奪われた下人に、雨の「ざあっという音」（P一八四・13）がそれと意識されないまま不安を加える効果を出している。

13 雨は、羅生門を包んで、……重たく薄暗い雲を支えている。　羅生門を包む「雨」と「夕闇」は下人を追い詰める状況の、「重たく薄暗い雲」は下人の暗澹たる心の、暗喩となる。「雨は……」「夕闇は……」「門の屋根が……」の擬人法が羅生門をめぐる空間を動的にし下人に迫る印象を利かしている。陰鬱な羅生門の情景が、主人公の重苦しい心象風景に重ってくる。

16 手段を選んでいる暇はない。　明日の暮らしを成り立たせる手段を選り好みする余地などない。「盗人になる」以外の手段を思案する暇はない。

16 選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。　生か死かの瀬戸際にあっては、生存することが第一義であり、手段の選択について善悪の判断に迷うのは二次的な問題にすぎないという冷厳な事実の確認。ただし、これは下人の「途方に暮れた」心理の動きは語っても、本当に下人の生存が〈限界状況〉まで追い詰められていたことまでは意味しない。迷っていること自体が、せっぱ詰まっていない証拠である。下人は、まだ、結論をためらったまま「ともかくも、夜を明かそう」（P一八六・2）と明日への先延ばしができる程度の状況にある。

●一八五ページ

3 選ばないとすれば――　下人の選択は、実際のところ、手段を〈選ぶ〉〈選ばない〉の二者択一の問題ではない。生き延びることを考える限り、手段を〈選ばない〉という帰結は論理的には最初から自明である。「――」による中止は、盗人になることの躊躇を表しているが、ここに来てやっと盗人になるという選択肢につきあたった。だが、「電着した」の後の「しかし」で、「この局所」はまたひっくり返される。

4 何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。　「低回」は、本来首を垂れて思案しながら行きつ戻りつしている様子。下人は座っているのだから、ここでは、考えの筋道の上で立ち迷うことだが、生きる道に行き悩んで思案投げ首で歩き回る下人の姿がおのずから重なる効果的な表現。「局所」は、全体の中の限られた場所のこと。「逢着」は、出会う、到着する意。「この局所」は、「選ばないとすれば――」を指す。思考の目下の帰着点である。

キー・ポイント　やっと　考える過程で、論理上それ以外にはないという絞られた場所（「選ばないとすれば」という条件の部分、これがすなわち、「この局所」の指すところである）までは認めざるをえないということを、〈ようやく〉認めたのである。したがって、「やっと」は、答えが見つからないまま何度も考えた末に、やっと答えを見つけたという、純論理的な推論の上のことではない。下人にとって、「飢え死にを逃れる」ためにはどんな非常手段をも取る以外にないこと、つまり、生きるためには「盗人になる」ほかに生きる術がない事実は論理を持ち出すまでもなく、初めから分かっているのである。だが、心理的には、それを直視してはっきりと認めることをためらう気持ちが「低回」を生んでいる。

5 この「すれば」は、……結局「すれば」であった。　「選ばないとすれば」の「すれば」を取り立てて「　」で示したもの。「すれば」という条件から導かれる論理的に明白な次の結論を避けようとする下人の不決断の指摘である。

キー・ポイント　**「すれば」**　仮定条件の形をとってはいるが、思考の理路の上では、「仮に～としたならば」という仮定の意を示すものではない。思考の理路（論理の展開）の局所に当たる「手段を選ばない」という一応の帰結は、下人にとって、必然的、確定的な条件である。生存の論理として「すれば」は「手段を選ばない以上」という確定条件であり、その後に続く最終的な帰結（「盗人になる」）も明白である。だが、論理的には確定的でも、心情的にはそれを認めることへのためらいがあるために、「すれば」を押し破れないのである。要するに、下人は理屈の中で立ち迷うだけであり、いやでも結論を出さざるをえないせっぱ詰まった状況にあるとも、追い込まれた心理状態にあるとも感じられない。限界状況下の生存の危機という切迫した立場を読み取ることは困難である。むしろ、主を離れた男として、今後の生き方を旧来の主に仕える道にではなく、己を立てる道に求める志向性を潜めながら、具体的にはただ「盗人」しか思いえない未熟な狭さゆえに、「盗人」の道の選択に必然の契機を見いだせないでいる甘さが、ためらいを生んでいるとみなすほうが、この下人にはふさわしい。

7この「すれば」の片をつける　「片をつける」は物事を決着させる、処理する意。「すれば」で立ち止まらず、最終的な論理的帰結に至り、「盗人になること」を肯定すること。

9積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた　生存を第一義として「盗人になる」ことを選択する勇気、すなわち、「盗人になる」ことへのためらいを踏み破る果断さが、欠けていること。ここでは、踏むべき二段階の過程が一緒くたにされている。まず、論理的な帰結を論理上肯定するだけなら、ためらう必要はない。次に、論理の結論に従って実際にやるかどうかの決断の問題が起こる。ここで初めて、ためらいが起こる。「勇気」の語はこの決断の段階にかかわる。下人は、自分の明日の生き方に実際にかかわる問題のために、論理的な結論を心理的に肯定できないのである。そこで「積極的に」という語が特に加えられているのである。副助詞「だけ」はここでは限度の上限を示す。「十分に～に至るまで（の）」の意。

キー・ポイント　**勇気の欠如**　結論がほかにはないのに、ためらいがあるのは、一般的道徳感情による「悪」を忌避する心理、決断してもその先が分からない不安の心理などがあるからであろう。もともとそんな気力も体力もないと臆する傾向があったためかもしれないし、利害得失を計算する心持ちもあったかもしれない。第二段で「悪」への憎悪が中心的に語られることから、語り手は、ここで「悪」を選び取る問題に読み手を誘導していると考えられる。この観点に立てば、生き延びる手段の選択と自己を支配する道徳感情との狭間にあって、思案に暮れている状態が勇気の欠如である。だが、「盗人になる」ことは「悪」だから、下人は「悪」への決断に迷っていたのだと直ちに言いかえることはできない。ただ、「盗人になる」決断に迷っていたと言えるだけだ。善悪の問題を立てるとしても、下人の道徳感情は、世間的、一般的な善悪の価値基準を超えるものではない。まして極限状況下の実存にかかわる善と悪の問題と考えるには、下人の勇気のレベルは緊張感を欠き、平板な躊躇の域を出ていない。

11大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。　「くさめ」はくしゃみ。

「大儀」は骨が折れる、面倒でおっくうなさま。雨の中、夜の寒さが迫る中で、肉体的、精神的な疲労が下人の動作を緩慢にしている。寒さが身にしみて立ち上がったのだが、同時に考えるのに疲れてきたと言える。

12 火桶　この語で秋の深まりを示す。

14 きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。　時間の経過と一層の寂しさを示す。

●一八六ページ

4 どうせ死人ばかりである。　「人目にかかるおそれのない」とあるように、肉体的、精神的な疲労から、人に煩わされずに休めればどこでもよいという投げやりな気持ちを示す。羅生門の現状を知っていたことは、下人が都の内から来たのか、それとも都の外から来たのかを考える際のヒントになる。

4 聖柄の太刀　下人が「太刀」を帯びていることが初めて明らかになる。以前の仕事に関係するのだろうか。武に心得のある若者なのか、若者にありがちな虚勢や見栄なのか、考える余地がある。太刀が「盗人になる」選択を自然に促していたという面もあろう。第二段以降の下人に必須のアイテム。

5 鞘走らないように　刀身が鞘から自然と抜け出てしまわないように。

5 そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。　足に焦点を当てて、いったん場面を切る働き。テレビドラマでなじみの暗転の手法。

7 一人の男が　「それから、何分かの後である。」という時間の断絶による場面転換によって、新たな事態の発生を告げる。「下人」という呼び方を用いず、「一人の男」として第三者的に客観化した視角で、あらためて新場面を読者に印象づけている。「にきび」によって下人だと分かる仕掛けである。

8 猫のように身を縮めて、息を殺しながら　「身を縮めて、息を殺しながら」は、同じ「縮める」の語を用いながら、前段の「首を縮めながら」（P一八五・16）の緩慢な動作とは対照的に緊迫感に満ちた展開を促す。危険に対して身構える動物的な本能を感じさせ「猫のように」の直喩が利いている。心理的な静から動への転換でもある。

9 赤くうみを持ったにきびのある頬である。　「男」が前段の「下人」と同一人物であることを確認させ、再び「下人」に戻すための仲立ちをする効果がある。また、火に照らされた「赤くうみを持ったにきび」は、下人の高まる緊張感と恐怖心を効果的に描写している。

●一八七ページ

2 高をくくっていた。　せいぜいその程度と決めてかかる。前段の「どうせ死人ばかりである。」（P一八六・4）を受ける。

4 すぐにそれと知れたのである。　「それ」は「上では誰か火をとぼして、……動かしているらしい。」（P一八七・3）を指す。

5 この雨の夜に、この羅生門の上で　人間はおろか生き物の影さえ絶え、雨と闇に囲繞された羅生門の楼上は、濃密な恐怖の雰囲気をたたえた不気味な非日常的世界として現出している。「この」はその異常な状況を強く指示する。誰かがいるとすれば、それ自体がすでに異常なのだ。「どうせただの者ではない。」（P一八七・5）はずだ。

5 火をともしている　「ともす」と「とぼす」（P一八七・2）のマバ行相通で変化をつけている。「とぼす」のほうが非日常的で異常事態の描写に、一般的な「ともす」が指示、説明の文脈で、と使い分けられている。作者の文体への細部までのこだわりの一例。

6 やもりのように足音を盗んで　「足音を盗

む」は、足音をさせないようにそっと。人間の気配を消して闇をはう下人に、夜はい出してきて捕食行動をする「やもり」の直喩は的確である。

9 幾つかの死骸が　散乱する死体の具体的な描写は原典には見られない作者の独創で、「或阿呆の一生」に芥川の解剖見学の記事が見える。「彼はその死体を眺めていた。それは彼には或短編を、(f)(g)王朝時代に背景を求めた或短編を仕上げる為に必要だつたのに違いなかつた。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だつた。」（「九死体」）。また、恒藤恭あての書簡に「医科の解剖を見に行った。二十の屍体から発散する悪臭には辟易せずにはいられなかった。」（大正三年三月十日）とある。

11 裸の死骸と、着物を着た死骸　盗人や琇に荒らされた死体と最近運ばれてきた死体であろう。

16 永久におしのごとく黙っていた。　「おしのごとく」は沈黙の死の世界の比喩であろうが、人権意識の点で問題を含んでいる。教場での指導に当たっては、十分に配慮していただきたい。後出「おしのように」（P三一・10）も同様である。

●一八八ページ

2 ある強い感情が、……この男の嗅覚を奪ってしまった　「ある強い感情」とあるのは、予期しない突然の衝撃の強さを強調する。その後、分析的に「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。」（P二九・11）とあらためて説明される。「ある強い感情が……奪ってしまった」という欧文直訳体擬人法の表現も、不意打ちの衝撃の強さを印象づける。

4 檜皮色の着物を着た、……猿のような老婆である。　「強い感情」に促されて目を剝いたまま、一気に老婆に関心が集中してゆく下人の反応が、「檜皮色の着物」「背の低い」「やせた」「白髪頭」「猿のような」という形容の畳みかけによって示されている。特に最後の「猿のような」という動物の直喩は、他の描写が個々の属性を示すのとは違って、老婆の存在全体を一つかみにして異形の者としての印象を決定的にしている。前行に「人間を見た」とあるが、まともな人間として見えるはずがない。

8 六分の恐怖と四分の好奇心　「ある強い感情」（P二九・5）を分析的、説明的に敷衍して、好奇心とないまぜになりながら、より恐怖心が勝った心理状態を六分、四分と数量的に表現した。「恐怖」と「好奇心」はともに、全く思いがけない事態に直面した衝撃に対する本能的な反射心理である。その強度の緊張が呼吸さえ忘れさせている。

9 旧記の記者の語を借りれば　「今昔物語集」巻二十四第二十話「人妻成悪霊除其害陰陽師語」に「頭毛太リテ怖シキ」とあり、巻二十七第十六話「正親大夫、□若時値鬼語」に「頭ノ毛太リテ、心地モ悪ク思エケレバ」とある。同じような表現は、巻十二、巻十四にもある。「頭身の毛も太る」は異常な恐ろしさの形容。身の毛がよだつ。

11 猿の親が猿の子のしらみを取るように　既出の「猿のような老婆」（P二九・8）を受けて、老婆の行為が動物の本能的なしぐさとして印象づけられる。猿が毛を掻き分けては一匹ずつしらみをとるように、毛根を分けて次々と抜き取るさま。「申の刻」（P一八八・5）を受けての芥川の遊び心かと想像してしまう表現である。

12 髪は手に従って抜けるらしい。　頭皮の腐敗のために、手を引けばそのまま抵抗なしに抜けていくさま。その自然さが一層の不

気味さを感じさせる。

13 その髪の毛が、……恐怖が少しずつ消えていった。　刺激に慣れるにつれて反応が弱まっていくという現象（反応強度の逓減化）。髪の毛が抜けるのを繰り返し見るのに応じて順次恐怖が薄れてゆく心理過程を論理的、段階的に語る理知的、技巧的な表現。

14 この老婆に対する激しい憎悪　死者を冒瀆する行為のおぞましさに対する拒絶反応から生じた怒り。一般的、世間的な道徳感情による善悪の判断から出た反応ではなく、衝動的、直感的な倫理感覚として、また生理的な身体感覚として、人間のあり方そのものを汚すものへの嫌悪感に由来する「悪」への憎しみである。

14 少しずつ動いてきた。　恐怖感が沈静化し判断力が相対的に回復する。その結果、老婆を異様な存在と見ることから、人間として見ることへの転換が起こる。この過程で、おぞましさに対する拒絶反応は恐怖から憎悪へと形を変えてゆく。

15 あらゆる悪に対する反感　この「悪」は、醜怪さにおいて、人間の日常性の範囲を突き破り、人間性の根源を掘り崩す行為である。人間のあり方の根源に触れた禁忌の侵犯としての絶対悪と見なされるがゆえに、一般的、世間的な道徳感情に由来する相対的で個別的な悪（例えば「盗み」のような）をとがめる次元を超えて、「悪」そのものへの絶対的な否定、「悪」の存在自体を全否定する反応をもたらす。

16 一分ごとに　「分」は、時間の「分」であろう。少なくとも数分間は老婆の行為を見つめていたことが分かる。少し前に「六分の恐怖と四分の好奇心」（P一八八・8）の表現があり、「恐怖が少しずつ消えていった。」（P一八八・13）「激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。」（P一八八・14）とあるので、「分」を量的に解する可能性も皆無ではないが、その場合は「一分ずつ」とあるのが自然。

●一八九ページ

3 老婆の床に挿した松の木切れのように　たいまつの火を憎悪の燃え上がる比喩に使っている。景と情の融合した印象的な比喩の使い方である。

6 合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。　行為の理由（動機）が不明な以上、行為を筋道立てて納得のゆく形で善悪の判断を下すことができない。「合理的」は理にかなう意。論理的。

7 この雨の夜に、この羅生門の上で　この表現は、梯子を上がりかけた場面に既出（P一八七・5）。そのときなされた「どうせただの者ではない」という予断が楼上の老婆の行為を目撃して確信となる。

7 それだけですでに許すべからざる悪であった。　「それ」は、直前の「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」を指す。陰惨な雨と闇に包まれ、寄りつく者もなく荒廃を極めた羅生門の不気味で異常な空間でなされる老婆の不気味で異常な行為は、そのおぞましさに対するほとんど生理的な嫌悪感から一切を判断させてしまうがゆえに、理屈抜きの本能的な否認の対象である。「それだけで」という強い限定は、下人の判断が、合理性を欠き、衝動的な、その場の雰囲気に左右される情緒的な反応においてのみなされていること、いわば気分の問題にすぎないことの確認である。人間性の根源にかかわる善の表出は、感情的、瞬間的な正義感を活性化する。だが、これはその場限りの生々しい気分の噴出というあり方のために、日

常的な行為の次元では永続できずに終わるのである。一考として、人間の死体遺棄が日常化する門の上で、暗闇と憂鬱な雨が支配する中、死体の冒瀆という人倫を犯す行為に悪を許さない潜在意識のスイッチが入ったという解釈もできる。

8もちろん、下人は、……盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。

「とうに忘れているのである」という言い方に、軽薄に心変わりする下人に対する語り手の揶揄的な響きを読み取る見方がある。だが、そもそも、下人が強い覚悟で「盗人になる気でいた」のでないことは明らかだ。「悪」に踏み切る寸前まで行っていたのに、たちまち「悪」を憎悪する側に回ったとみるから軽薄な転向に見えるにすぎない。実際は、「盗人になることを〈考えていた〉」こととなぞは、とうに〈消し飛んでしまった〉」ので、衝撃の強さは言えるとしても、軽薄な心変わりなどという大それたものはない。「盗人になる」ことがすでに潜在的に心の志向としてあったに違いない。が、それと実際に「やる気になっていた」との間には踏み越えるべき断絶がある。「盗人になる気でいた」とあえて断言的に語る語り手の意図的な軽薄に、読み手が乗ることはない。「もちろん」は、〈言うまでもなく〉、「飢え死に」か「盗人」かなどに心を向ける余地もないほど下人の心理は切迫していたという状況の確認である。「このとき、誰かがこの下人に、……問題を、あらためて持ち出したら、恐らく下人は」（P一八八・16）とあるように、「飢え死に」か「盗人」かいう問いは、ここでは、第三者による仮の設定であり、下人自身にそんな余裕はない。

キー・ポイント　悪を憎む心　「盗人になる」以外に選ぶべき道はないと考えていた下人が、老婆の行為を見て「何の未練もなく、飢え死にを選」ぶのでは、唐突で軽薄、単純かつ身勝手、無反省な下人の幼児性すら示すものであるという批判が起こるのは不思議ではない。だが、これは人間にとっての「善悪」の意味を平板に一元的に捉えたための誤解である。「盗人になる」という場合の「善悪」と「死者の冒瀆」の場合のそれとには断絶がある。〈盗人にも三分の理〉というように、「盗人になる」場合の「悪」は相対世界の道徳的価値判断に左右される問題である。しかし人間性の禁忌に触れる「悪」は何人によっても人間の名において断罪されうる次元にかかわっている。たとえ下人が「盗人になる」悪を心に抱いていたとしても、そのことがただちに「死者の冒瀆」を憎悪する善に立つことと矛盾するとは言えないのである。状況に促されたある瞬間には、人間は、たとえどんな世俗の極悪人でも、利害や損得抜きに、その痛ましさに惻隠の情を発し、その酷さに憎悪の情をたぎらせることがある。「盗人になる」悪を第一の選択肢としていたからと言って、下人が老婆の行為のおぞましさに憎悪を燃え立たせたことを〈目くそ鼻くそを笑う〉類の話に矮小化して批判するのは、あまりに形式論理である。下人はここで人間性の根源にある「善」の可能性に触れている。批判がありうるとすれば、むしろ問題はその先にあると言うべきである。人間性の根源から発する善の反応は、以後の下人の行動の帰結に明らかなように、決して持続的に形成されるものではないという点こそ、指摘されねばならない。理路を欠いた衝動的反応にすぎぬために、日常的な行為の場面では、（おそらく宗教的な回心の場合を除いて）、この善は生き延びることはできない。ここで芥川の「蜘蛛の糸」

の主人公の善が結局はたった一回の行為でしかなかったことを思い出してもよい。

13 弩にでも弾かれたように　前行に「老婆が驚いたのは言うまでもない。」とあるように、不意の侵入者に対する驚きによって、老婆が悪鬼でも怪物でもなく、ただの人にすぎないことが早くも示されている。

14 おのれ、どこへ行く。　相手をののしる語気を込める。「おのれ」はここで二人称の代名詞から、感動詞に転じた用法。

●一九〇ページ

2 勝敗は、初めから、分かっている。　若く力のある男とやせ衰えた老婆では勝負にならない。

4 何をしていた。　下人は、老婆の異常な行為をすでに目撃している。実際に知りたいのはその理由である。目撃したことを言わずに、「何を」と問うのは、自分の手の内を見せず、老婆の口から行為の全体を語らせるためである。

4 言え。言わぬと、これだぞよ。　強者の立場から、弱者に迫る言葉で、いかにも性急で、脅しつけるような感じが出ている。

5 白い鋼の色　刀身の換喩である。芥川らしい表現と言えるが、技巧的に凝りすぎているか。冷たい切れ味を感じさせる。

7 執拗く　執念深く。じっと強情に。「しふねし」という古語に、同じ意味の「執しつ拗よう」という漢語を当てたもの。素性の知れぬ侵入者への警戒心が促すかたくなさである。

8 全然、自分の意志に支配されている　「全然」はここでは「全く」「すっかり」の意。老婆が「ただの者」にすぎず、生殺与奪の権が自己の掌中にあることがはっきりした。

9 今まで険しく燃えていた憎悪の心を、……冷ましてしまった。　あまりにも無力な老婆を前に、異常な悪への憎悪は対象を失い、憎むことの根拠が消失する。欧文直訳体で、下人の新たな「意識」こそが中心にあって以下の下人の心理と行動を促すものであることを印象づける擬人法の表現である。

11 安らかな得意と満足とがあるばかりである。　生かすも殺すも自分の思いのままという新たな「意識」は、老婆をみごとに取り押さえた行為の成功に自己満足の味わいを与え、勝者の優越感と余裕を生み出す。

13 検非違使の庁　平安時代に都の警察、検察、裁判の権を握り、治安の維持をつかさどった役所。その役人は職掌から、庶民には権力をかさにした横暴者と見られていたことが考えられる。

13 旅の者だ。　下人が都の外から京へ上った者（主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ラショウモンニノボリテシニンヒトヲミヌスムトコトヲ）」の設定）か、それとも都で使われていた者かは見方が分かれる。京の町で使われていた者とするのが大方の論だが、異論も出されている（「鑑賞」参照）。いずれにしても、「少し声を和らげて」とあるように、老婆に強い警戒心を抱かせないように意図した言葉である。

●一九一ページ

1 まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目　「肉食鳥」は、猛禽類。他の鳥や小動物を捕食するワシ・タカ、フクロウなどを指す。「鋭い」は、腐肉をあさる貪欲さ、油断のない警戒心、得体の知れない不気味さの表現である。骨と皮の皺だらけの顔の中で、下人を凝視する剝き出しの目の異様さを印象づける。無力に捕らえられたとはいえ、異常な行為の理由がはっきりしない限り、老婆の気味悪さは消えていない。

キー・ポイント　動物の比喩　老婆の存在は、「猿のような」（P一八八・5）「鶏の脚の

ような」（P一九〇・3）「肉食鳥のような」（P一九一・1）「鴉の鳴くような」（P一九一・3）「蟇のつぶやくような」（P一九一・9）と、一貫して鳥獣の様態で身体的に特徴づけられ、これら小動物の生に類する老婆の姿をほうふつとさせる。その動作は、「猿の親が猿の子のしらみを取るように」（P一八八・11）と人間以下の行為を連想させる。いずれも人間の埒外に堕ちた陰にこもる薄気味の悪さを醸し、荒廃の世に動物的な生存としてかつがつ生を営む老婆のいじましさとその裏のしたたかさを印象づける。総じて嫌悪される暗い否定性の趣を持つと言えよう。なお、下人に関しては、「猫のように」（P一八六・8）「やもりのように」（P一八七・6）というように、その本能的な警戒心を特徴づけるものとして、その動作に対して用いられている。

6老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。　異常な行動には、それに見合う異常な動機がなければならぬ、という無意識の期待が外されたために起こる失望。老婆の答えは下人の期待に反してあまりにも現実的で卑小なものであった。「存外」は思いの外。

6失望すると同時に……心の中へ入ってきた。　老婆の答えが失望をもたらすものであったことは、先の「死体の髪を抜く」行為への憎悪をあらためて生じさせる。つまらぬことで自分に驚愕を強いたことが許せないのである。「前の憎悪」とはいっても、死者冒瀆の醜怪さへの人間的反応としての憎悪ではなく、卑小な目的のための功利的で醜悪な行為への憎悪である。下人は「許すべからざる悪」を懲らした「得意と満足」を味わっていた。ところが実際の相手は、「平凡な」悪の鏑びた銭せんにすぎず、その結果、己の行為自体も価値の下落を強いられるのである。下人の心中で勝利の自己満足は色あせ、つまらぬ悪への侮蔑が頭をもたげる。

8片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり　下人と争い、取り押さえられ、腕をねじ上げられても、老婆は自分が抜いた髪を片手に握ったまま決して離そうとしない。生きるための行為の切実さが如実に示されている。だが、「憎悪」と「冷ややかな侮蔑」の心で老婆を見る下人の目には、この切実さは全く映らない。

9蟇のつぶやくような声　いわゆる濁だみ声ごえであるが、動物の直喩により老婆の醜悪さを印象づける。

11そのくらいなことを、されてもいい人間ばかり　老婆が羅生門の死人たちの生前の行状をすべて知っていたとするのは不自然。引き取り手もない死人として遺棄された羅生門の死人たちがろくな生き方をしていなかったことは明々白々のはずだ、と決めつけ、老婆は「そんなことをされてもいい人間ばかり」と言ったのである。応報的に「悪いこと」をしたから「悪いこと」をされてもいいという論理を確実に当てはめられるのは、老婆がその髪の毛を抜く女に対してだけである。たまたまその生前の詐欺行為をよく知っていた女一人の例をいきなり一般的に拡大して、こいつらはみんな悪いやつなんだ、と語る点に、老婆の自己弁明の強引さが表れている。さらに敷衍すると、老婆にとってみれば、「悪いこと」をしなければ生きていけない以上、この世に生きる人間は誰でも「悪いこと」をしているはずだということになろう。「悪いこと」をしなかった人間なら、老婆がその髪を抜くことはない、という話ではない。理屈にならないところまで理屈にしようという強引さは、理屈抜きに「悪いこと」を

せざるをえなかった老婆の生存の状況を逆に照らし出すものである。「口ごもりながら」無理な理屈を語る老婆は、理屈など立てている暇もなく、生きるためには死体の髪を抜かなければならない生の姿を語っている。

12わしが今、髪を抜いた女などはな　「干し魚」の読みは原典で「ほしうを」とルビがある。この挿話は「今昔物語集」巻三十一第三十一話「大刀帯陣売魚嫗語（ニウラウリンノコト）」によっている。「蛇（クチナハ）ハ食（クヒ）ツル人悪（アン）」とあり、食べると身体に毒になると考えられていたらしい。単なる商品詐称ではなく毒と知りつつ売ったことになる。そんな女の髪を抜いて、どこが悪いかという論理である。なお、女は、主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ノボリテニノカミニシニビトヌスムトヲミルコト）」では、老婆の女主人で、葬る者がないので、老婆が羅城門に置いたとされている。

13往んだわ。　「往ん」は、ナ変動詞「往ぬ」の連用形撥音便に、過去の助動詞「た」、確認の終助詞「わ」が付いた形。

15この女のしたことが悪いとは思うていぬ。　自己の行為を「なんぼう悪いことかもしれぬ」と言い切る老婆に、事の善悪ははっきり自覚されている。世間的な規範に従う常識的、道徳的な判断力は備えているのだ。だが、生身の人間は道徳のかいらいではない。老婆の口から語られる女の詐欺商売には、生きるための庶民の切実ないじましさがある。これは、荒廃した世に何とか生きる方途を得ようとする庶民の不逞なたくましさ、といっても同じだ。この切ないしたたかさは、ただエゴイズムといって済ますことのできない人間の相なのである。老婆の主張は、かつがつ生きるために選ばざるをえない行為に道徳的な善悪をあげつらっても無意味である、ということである。

16されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。　老婆の論理を単なる言い訳、さらには自己正当化の居直りと読むか、生き延びることの切実さから絞り出された声として聞くかで、評価は対極となる。「長い抜け毛を持ったなり」（P一九一・8）、「口ごもりながら」（P一九一・9）語る老婆の言葉は、生存のぎりぎりの場所から、「悪いこと」と知りつつなおそうせざるをえない者の「しかたがない」生を裏打ちするものである。

●一九二ページ

3おおかた……大目に見てくれるであろ。　「おおかた」は推量と呼応するときは、おそらく、多分の意。老婆の自我意識を示す。「大目に見る」は、寛大に扱う、の意。

4老婆は、大体こんな意味のことを言った。　老婆の会話の直前に「こんなことを言った。」（P一九一・9）とあるのに、また「言った」というのは重複だが、前後で応じることで段落の区切りをつける役割を果たす一行である。直接話法で会話を引いた後、「だいたいこんな意味」とあると、会話部分に省略があるとも取れる。書誌的には初出で間接話法であったものを直接話法に改稿した際、初出のまま残された箇所である。「こんな意味」は、老婆の論理展開を言う。「どうせただの者ではない」と下人から見られた老婆が、「ただの者」として口を利いたのである。ここに至って読者には、鳥獣の直喩で語られた老婆の気味悪さは消え、みすぼらしく弱々しい哀れな老婆の姿が、同じ鳥獣の直喩のもとで浮かび上がる。同時に羅生門のおどろおどろしい気配も消え、現実世界の舞台へと転換する。老婆の正体は尼僧ではないかという推測も可能だ。「檜皮色」は尼僧の衣の色であり、尼

僧であれば短い髪も説得力を持つ。さらに、接続詞を駆使した老婆の論理的弁明や、「現に」「菜料」など漢語の多用からも、漢籍を修得したことがうかがい知れる。

キー・ポイント　老婆の論理　形式的には、初めに〈悪には悪で報いてよい〉という〈応報の論理〉、次に〈生きるために「しかたがなく」する場合、悪は許される〉という〈生存の論理〉が語られる。前者の〈応報の論理〉は、直ちに〈善に対して悪は許されるのか〉という疑問を生み出す。しかもこれは後者の〈生存の論理〉と重ねて、〈生きるために「しかたがなく」する場合、善に対して悪は許されるのか〉という問いを必然的に導く。〈死んだ女が善人であったなら、老婆は髪を抜かなかったのか〉と具体化できる問いである。老婆はそこまで追究し原理化する理路を踏まず、眼前の具体的な状況に即して可能な理屈を投げたにすぎない。理屈が立つことはともかく言おうという稚拙さが、前後二つの論理を不整合にしている。その稚拙さは、これ以外にない生の選択の切実さと切実さゆえのしぶとさから出ているものだ。

だから、二つの論理を同等に見ることはできない。むしろ後者が老婆の依拠する唯一の論理だと言うべきであろう。生きることを第一義とする限り、生きるうえで「しかたがなく」なした行為の善悪を問うことは意味を持たない。老婆の論理はこれに尽きている。人間は誰でも生きている限りしかたなく悪に従う。誰もがしかたなく悪を生きる世界で、しかたがなく犯した悪をとがめられる人間などいない。自分は他人の悪を許し、他人は自分の悪を許すようにして人間は生きている。老婆の論理はこのような庶民の生活感情を代表するものである。〈生きることの前では、善悪に価値はない〉という論理、「仏像や仏具を打ち砕いて」「薪の料に売っていた」（P一八七・7～8、9）価値崩壊の時代の庶民の、惨めさとしぶとさが同居した、いわば〈生存の庶民的ニヒリズムの論理〉である。それを盗人猛々しい居直りと見て、自己正当化の詭弁と読むのは倫理的すぎる読み方である。また、世間智の偽善を嗅ぎ取り、唾棄するのも偏した見方である。人倫に背く死者の冒瀆という異常な行為も、無力な老婆の生きる場所から発する老婆の語りの中では、生きるための最小の悪、文字どおり「しかたがない」行為の一つとして捉えられている。

5冷然として、この話を聞いていた。　「冷やかな侮蔑」と「憎悪」を込めて老婆を突き放して見ている下人には、老婆の言葉に同情する余地はない。老婆の言葉は単なる言い訳として耳に入るだけである。

6大きなにきびを気にしながら　親身に老婆の話を聞く態度ではなく、関心が別の所にあって「冷然として」聞いている様子がよく出ている。

7ある勇気　以下「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」と言いかえられている。

8この男には欠けていた勇気　「『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気」（P一八五・8）を指す。「肯定する」とは単に論理上そうだと認めるのではなく、実行を決断することまで含んでいる。

9この老婆を捕らえたときの勇気　老婆の行為を「許すべからざる悪」と断定してこの老婆を取り押さえたときの勇気。つまり、〈悪を憎み懲らそうとする勇気〉。

9 全然、反対な方向に動こうとする勇気　盗人になることを積極的に肯定し、〈進んで悪を行おうとする勇気〉。「反対の方向」は〈善へ向かうか、悪へ向かうか〉の意味。したがって「門の下で、この男には欠けていた勇気」と重なり、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気」と反対の関係にある勇気である。

12 意識の外に追い出されていた。　考える余地すらない。生身の下人にとって、生きてゆくことは自明の前提である。「餓死」は最初から〈避けるべき事態〉として想定されていたにすぎない。なるほど、下人は手段を「選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。」（P一八四・16）と迷っていた。だが、下人が「四、五日前に暇を出された。」（P一八四・3）後、路頭に迷ったあげく飢えと寒さに迫られ、「餓死」の危機を目前にしていたとするには、この下人には余裕がありすぎる。「一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそう」（P一八六・2）というようなゆとりは、明日をも知れぬ危機的な限界状況にある男の思うことではない。激しくつかみかかり老婆を組み伏せる勢いもとても飢えにさいなまれる男のそれではない。「にきび」がその若さを明示する若い男にとって、「餓死」は現実と言うよりも措定された観念の問題にすぎない。この男は自殺を考えない。男には開拓すべき未来があり、生きることを自明の前提としているのだ。羅生門の下人にとって「餓死」は、このままでは立ち行かないぞという成り行きの先に観念されるものでしかないのだ。「餓死」が観念でしかないところで、生きるための行動を決意した男が「餓死」を念頭にすら置かなくなるのは、全く自然な成り行きである。つけ加えると、「餓死」については、楼上での「あらゆる悪に対する反感」（P一八八・15の場面で、「恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。」（P一八九・2）と、「餓死」を選ぶ下人の心が語られていたことが指摘されるかもしれない。だが、これは、語り手が第三者に託して「誰かが……問題を、あらためて持ち出したら」（P一八八・16）と仮定した選択の問題であり、この場面で下人自身が「餓死」か「盗人」かなどと悠長に構えていたのではないことは明らかである。この場面の「餓死」は語り手の観念の中にしか存在しない。

14 嘲るような声　老婆の自己弁明の論理は、その形式的整合性で捉える限り、老婆自身への加害を肯定する諸刃の剣である。下人には生きるための悪が許され、老婆は自分が悪をなしている以上、自分に加えられる下人の悪を許さなければならない。下人の声には、老婆の論理が自分の行為の決断のために格好の口実となり、老婆自身の身に返ることになる愚かさへの、皮肉と悪意を込めた嘲笑の調子が込められる。

15 不意に右の手をにきびから離して　思考から行動への転換、決断して踏み出す姿。下人を束縛していた利き手がここで解放され、自由を獲得するきっかけとなっている。

15 老婆の襟髪をつかみながら、かみつくように　酷く非情に老婆を押しひしぐことで、ためらいや自己嫌悪を振り切り、荒々しく悪へ踏み切ろうとする姿である。「襟髪」は、首の後ろの髪。襟元、首の後方も言う。

●一九三ページ

1 俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。　老婆の論理を逆手に取った下人の正当化の論理。自分の迷いを振り切り、生

きる手段の選択に当たって、最初から潜在的に志向されていた「盗人になる」道を自身に納得させ、合理化するための強弁である。下人は最初から実際に「餓死」に迫られた切実さを欠いている。そもそも、下人には道徳的な「悪」へのためらいがあったのだろうか、ただ「盗人になる」ことへのためらいがあっただけではないのか、という疑問が起こる科白である。

キー・ポイント　**老婆と下人の現実**　下人に最初「盗人になる」ことを肯定する勇気がなかったのは、道徳的に潔癖な心の持ち主であったからでも、「餓死」の危機を前に激しい心の葛藤を経て唯一の結論を得たからでもない。この若く力にも欠かない男は、前途に迷っている最中に頭をよぎった「盗人になる」道に手早くしがみついたのである。ほかに思いつかないから「盗人になる」ことを唯一の選択肢としたのである。ほかに方法がないからこれをするしかないという心の志向はあった。欠けていたのは大胆に踏み切る度胸である。それまで使用人として世間に暮らし、人並みに生きてきた男には、ためらいはごく自然な心の動きである。「悪」への不決断を、「善」との対比で、人並みの道徳感情以上にことさらに倫理的に意味づける必要はない。高邁な「道徳心」も切実な「餓死」も縁遠い下人に、善と悪の両極に引き裂かれた魂などは存在しない。必要なのは踏み切る契機である。老婆の言葉で初めて、「生きるためにしかたがない」行為が「悪」ではないと気づいたというのは、ほとんど冗談に等しい。すでに、生きるためには「悪」の行為もしかたがないと言葉にならない結論は得ていた。それに言葉が与えられ、男は踏み切ることができた。老婆の論理は行動へ踏み出すきっかけとして格好の口実を与えるものであった。

　老婆の現実は、髪の毛を握って離さない一事が示すように、仕様のない行為にしがみつく切実さを持っている。ことさらに老婆の不気味さを示すような動物の比喩は、実際にはその惨めな生をそのまま反映する。老婆の論理はその現実の表明であり、それがしぶとい居直りや自己正当化と見えるのは、現実の過酷さの中で必死に生に執着する庶民のしたたかさの結果にすぎない。老婆は蹴倒されても下人の「足にしがみつこうとする」ほど必死なのだ。これをエゴイズムと倫理的に断じても詮無い話である。

3 下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った。

　「悪」へ踏み切るための象徴的行為。「盗み」が目的なら、老婆の持つ死人の髪や転がっている死体の着物まで奪ってもよいはずである。

5 夜の底　羅生門の楼上から下の深い闇へ視線を注ぐ表現で、奈落へ駆け下りる印象。次の「黒洞々たる夜」と共に人間の生の底知れぬ不可解さ、不確かさ、捉え難さを表象する。我欲に満ちた世界、一切の救済を断たれた無明の闇、無秩序ながら活気に満ちた自由な世界、主人公の悲惨な末路の暗示、この世の地獄を駆け抜ける悪の輝き等々、多様な見方を誘う含蓄がある。夏目漱石の「吾輩は猫である」の「声の底」などから学んだ表現方法だとも推察できる。また、川端康成も「雪国」で「夜の底」という表現を用いている。

10 黒洞々たる夜　暗黒の夜。作品の最後に一切を飲み込む深い闇の世界だけが残される。非日常である羅生門の内部から、白髪を逆さまにしてのぞき込む老婆の目には、日常である京の都が、一切の救済を断たれた地獄の暗黒世界として映っている。

11 下人の行方は、誰も知らない。　初出は、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」とあり、初版本では末尾が「急いでいた。」と変わり、さらに改稿されて現行の形となった。「行方」は、下人の以後の運命を含む表現。暗黒の世界に姿を消したまま、その運命は作品世界の向こうに投げ出されている。

キー・ポイント　末尾の表現　断絶と余韻の効果を生む象徴的な一文。まず、駆け下りた後の行方が不明で、作品世界の時間進行が断たれる。下人自身、自らの今後の行動を分かっているのか不明だ。次に、作品世界そのものの判断停止で、下人の人生という意味で、その後の運命が断たれている。語り手は、下人の視点と心理に重なりながら話を進めてきたこれまでの語りの形を捨てて、下人から身を離す。下人が語り手の及ばない世界に立ち去ったとも言えるし、語り手が下人を突き放したとも言える。同時に読み手もこの夜の闇の中で突き放される。幕が降りないまま劇が終わってしまった感じによって、読み手には、下人の行く末についてどんな想像も許されることになる。なお、典拠として「今昔物語集」巻二十九第一話「西市蔵入盗人語」の末尾「盗人ハ蔵ヨリ出テ、行ケリム方ヲ不知ズ」に拠ったかとも推定されている。

注意する語句

（＊で用例を示した）

一とおり…物事の状態が普通であるさま。尋常。
＊その辛さは一とおりではなかった。

足踏み…ある場所や家などに立ち入ること。
＊この場所には二度と足踏みをしない。

洗いざらし…衣服の、洗いすぎて色が褪せた様子。また、その衣服。
＊洗いざらしのシャツを着る。

途方に暮れる…どうしたらよいのか分からず、困り果てる。
＊財布をなくして途方に暮れた。

暇はない…余地やゆとりが全くない。
＊仕事がたまっているため、眠る暇はない。

あげく…（あることをした）末。いろいろやってみた結果。
＊どの店に入ろうか迷ったあげく、最初に見つけた店に決めた。

手段を選ぶ…あることを実現させるための方法を迷う。
＊手段を選ばない犯行。

片をつける…仕事やもめごとなどの始末をつける。決着をつける。
＊借金まみれの生活に片をつけて新しい商売を始める。

息を殺す…息もしないでじっとしている。
＊ライオンが息を殺して獲物の様子をうかがっている。

高をくくる…大したことはないと見くびる。侮る。
＊それほど難しい問題ではないと高をくくっていたが、大きな間違いだった。

語弊がある…言い方が適切でないために起こる弊害。
＊駄作だと言うと語弊があるが、魅力に乏しい作品であることは間違いない。

とうに…早くに。ずっと前に。とっくに。
＊パーティーの準備はとうにできていた。

わなわな…恐怖や怒り、寒さなどで身体が震えるさま。
＊彼女は怒りのあまりわなわなと震え出した。

冷ややか…態度が冷淡なさま。
＊冷ややかな視線を向ける。

口ごもる…返答に窮すなどして、言うのをためらうさま。また途中でいうのをやめるさま。
＊その問いに彼は思わず口ごもった。

現に…目の前に。現実に。実際に。
＊目撃者が現にここにいるのだから、うそをついても無駄だ。

大目に見る…緩やかに扱って、とがめない。寛大に扱う。
＊子供なので、失敗しても大目に見てもらえる。

嘲る…馬鹿にして笑う。悪口を言う。
＊人の失敗を嘲るようなことをしてはいけない。

念を押す…重ねて確かめ注意する。
＊集合時間を守るよう念を押したのに、やはり彼は遅刻した。

鑑賞

「羅生門」鑑賞の要として、作品の主題をめぐりさまざまな見解が示されている。代表的なものについて、そのキーワードを中心に見ておきたい。

1　エゴイズム、限界状況、善と悪

「羅生門」は〈暗さ〉によって読まれてきた小説である。「生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいている」（吉田精一）、これが大方の「羅生門」評価の軸である。「生きるためにしかたがなくすること」という言葉を人間の醜さとして立言し、文学的評価に倫理を密輸入することで登場人物を裁断する。そのことによって、この作品は、（そこまで意識されることはないとしても、）否定像の対極に正しい人間像を措定した「かくなるべからず」から「かくあるべし」への渡橋が可能になる教材として機能する。「羅生門」は教材としてそのような形で生き延びてきたのではないだろうか。この作品の〈暗さ〉をどう扱うか、教室での授業に戸惑った経験を持たれる方も少なくないのではなかろうか。

「エゴイズム」に加えて「限界状況」という前提がこの暗さを逃れがたく補強する。生存の瀬戸際にある生はエゴイズムを剝き出しにする。そこではいかなる悪も許容される。悪を犯さないものはなく、悪を犯したものは、自分が悪を犯したというまさにそのことによって他者の悪を許すとともに、他者の悪によって自分の悪も許されるという無限ループが成立する。一切を許容する「倫理の終焉する場所」（三好行雄）が現出する。こうして「羅生門」は、不可避な悪なら悪は肯定されるという倫理の袋小路に追い込まれて、永遠に救われることのない、人間と社会の全き否定像が完成する。この否定像が、教場では、逆説的に倫理の衣をまとって、「あるべき人間」の像を呼び出すのである。老婆と下人の卑しさに対して、餓死を前になお「しかたがない」とは決して口にしない偉大な人間像が暗黙の内に強いられる。

この倫理を呼び出す裂け目は、「羅生門」という作品に「エゴイズム」と「限界状況」という強固な枠をはめたところから生まれてくる。「羅生門」の世界を実地に歩いてみれば、それがきわめて観念的、倫理的な読みにすぎないことが分かるはずである。大岡昇平の「野火」が限界状況における兵士のカニバリズムを描き出したのと同列に、「羅生門」の老婆と下人の状況を言うことはできない。「限界状況」が真に「限界状況」なら、「エゴイズム」などという言葉はすでに吹き飛んでいるはずである。

人間の「善と悪」を軸にして、「エゴイズム」に呪縛されずに読むとすれば、あるきっかけのもとでは正義感に燃え、ある契機では盗人にもなる人間の姿が浮かび上がるだけである。「善と悪を同時に併存させている矛盾体である人間そのものをさしだしている」（駒尺喜美）という見方が妥当する。

2　世俗の論理への反逆と自己解放

「エゴイズム」や「善と悪」の軸を離れて、新たに「羅生門」に〈若さ〉や〈明るさ〉を読む見方が提唱されている。「羅生門」は作家として立つ決意を込めた青年芥川の作品であり、「己を繋縛

するものからの解放の叫び」（関口安義）を読み取ることができるというものである。老婆の論理が代表する世俗一般の偽善、言い逃れの「生きる論理」に敢然として戦いを挑み、「反逆の論理」を獲得して圧倒的に勝利した若者、世俗の律法の束縛からの自己解放を成し遂げ、自由な世界へ飛翔する若き野性児、下人の行動はそのように捉え直される。羅生門の暗さは新生を促す舞台の暗さであり、この暗さがあって初めて、下人の勝利の姿が輝く。そこに未来への明るい可能性すら読み取れるというのである。下人が鄙の純朴な若者で、都へ上ってきたという読みがこれを補強する。新たに得た勇気、生きることへの自信を胸に未知の京の町へ、新たな世界へとひた走る若者像が浮かび上がる。

だが、反逆が結局「盗人」になることでしかないなら、自己解放も何もあったものではないと言えるのではなかろうか。反逆が他者への反逆であると同時に、それまで世の倫理に従ってきた自己自身への反逆を含むとしても、それが「盗人」になることの選択を必然化する理由にはならない。反逆するなら、まず自己の志向を方向づける「盗人になるよりほかにしかたがない」という思考の論理に反逆しなければ意味がない。「しかたがない」という論理こそ反逆すべき世俗の論理そのものではないか。それをしなかった若者は、今まで周りの掟に従順な青年でいたのを破って、ただ従前の己の論理を体現すべくやみくもに突っかかり、老婆から着物を奪っただけのことだ。とても自己解放の明朗さもカタルシスも感じ取れない体たらくである。「羅生門」を倫理的是非を問う〈暗い〉局所に追い込む「エゴイズム」から解放しようとする試みが、〈若い〉未熟な精神のありさましか見いだせない結果になるとは何とも皮肉な成り行きである。下人を田舎出の純朴な若者と規定したことからくる帰結である。この若者像を支持する根拠は「羅生門」には見いだせない。

「盗人になること」は、初めからそれ以外に選択肢がないとして下人の内心では潜在的に予覚され、安直に選択されていたコースなのだ。彼はただ踏み切る契機が欠けていた。彼は最初から持っていた彼のひそかな志向を、老婆との遭遇によって、現実化できたというだけで、そこに反逆も新生も読み取ることはできない。

3　美的世界

「エゴイズム」も「自己解放」も「羅生門」の読みを開く場所には出ていかない。ならば作品自体が闇の輝きを放つ一つの美的世界であると捉え、「羅生門がかもし出す、王朝的、というよりもかなりエキゾチックな雰囲気の世界それ自体」（平岡敏夫）を読めばよいのだろうか。「今昔物語集」の野趣を発見し、親炙した世紀末作家たちの〈世界苦〉の憂愁に学んだ作者の芸術至上主義への傾きを基調にして「羅生門」の世界を眺めると、この美的世界の創出という見方はとても魅力的だ。

だが、およそ芸術的創造は、美術や音楽を含めてそもそも初めから美的創造ではないのか。創造された作品に向き合って一つの美的な雰囲気があるといってもそれはトートロジー（同語反復）にすぎない。美的選良という過剰な自意識にとらわれた芸術家が美的創造それ自体を目的として芸術至上主義に入れあげ、特異な美の世界を創造したとしても、出来上がった作品は〈読まれ〉なければならない。作品の細部から全体にわたる〈読み〉を解除し

て足れりというわけにはいかないだろう。当然、「羅生門がかもし出す雰囲気の世界」に踏み込んだ〈読み〉が行われなければならない。そこで強調されるのが「羅生門」の〈異空間〉である。

4　異空間および境界

〈異空間〉とは、下人が昼の日常世界に対する〈異人〉となる転換の場としての羅生門上層を指す言葉である。「羅生門」は、時の〈境界〉である「日暮れ」から始まり、場の〈境界〉である「梯子・階段」を経て、羅生門上層の「雨の夜の異空間」すなわち『因習的道徳』にみちた昼の世界に対する夜の世界」（平岡敏夫）を舞台に、下人が老婆に出会う物語として読まれる。下人は死骸の髪を抜く老婆の行為を昼の日常的世界の行為として捉え、夜の世界〈異空間〉への裏切りに憎悪をたぎらせると見るのである。この〈異空間〉が2の〈反逆と自己解放〉の転換の舞台となりうること、すなわち、〈異空間〉論と〈反逆と自己解放〉の論とが相互補完的に成り立ちうることは容易に見て取れる。また、〈境界〉をめぐる二項対立的な要素として、確かに「羅生門」には、洛中と洛外、老婆と青年、生と死、日常と非日常、秩序と混沌、束縛と自由、喪失と獲得など、対立の狭間を構成する〈境界〉がひしめいている。

だが、〈異空間〉と言い〈異人〉と言ったところで、京都の町そのものが衰微の果てに日常世界から頽落している状況下では、羅生門の〈境界〉をめぐる明確な二項対立は成立しない。対立よりも溶融の境界領域にあまねく浸された舞台と見るほうが作品にかなっている。〈異空間〉は、対立の相ではなく、日常世界の荒廃が濃度の臨界を指して溶け出す〈境界〉として読み直されなければならない。下人は、反逆でも闘争でもなく、日常性の溶融（メルトダウン）から、なるべくして盗人になったのである。失職が盗人へと促すきっかけとなり、羅生門楼上の老婆との遭遇が盗人になるきっかけを与える。羅生門はその契機の濃度を臨界点まで上昇させる場所である。門下から楼上へ「はしご」をにじり登るのは、じりじりと契機の臨界まで迫る下人の登攀にほかならない。遭遇の場所としての楼上の設定は、この〈上昇〉の意味での必然が導いたものである。「下人が盗賊になる物語」（前田愛）は、日常性の溶融を促す〈境界〉の媒介を経て成立する。「羅生門」を、下人の「転生」（杉村優）ないし「通過儀礼（イニシエーション）」（三谷邦明）の物語として読むことは、この契機に沿って、妥当だと思われる。

5　「作者」の誕生と、終わりない言葉

しかし見落とすわけにはいかないのは、やはり「作者」の現在時における執筆行為である。下人の局所的な観念を批評する語り手は、明らかに下人とは別人格であり、語り手こそが「下人の生きる観念の闇というアポリアに立ち向かう」（田中実）のであり、下人の暴力性へと同化し得ない語り手の強度を推し量ることで芥川文学の生きる力を見出すという道も開かれた。しかし、その語りによって示されたプロットにこそ覆うべくもない暴力性があり、貨幣経済からは押し出されてしまった下人の老婆への暴力の発動もまた、「排除という秩序維持の機構を下人が相対化しあぶりだす」という「物語」（篠崎美生子）を導き出しているに過ぎないのかも

しれない。そうした「作者」は、自らが語り出そうとする意図を明示しようとするが、「意図のもとに出来事を語るという試みを貫徹することの限界を示す」（小谷瑛輔）という自己言及的なアイロニーを抱え込んでいるとも捉えられる。そうした「作者」の執筆行為は、エッシャーの手で手を描く騙し絵のようにどこまでも自己増殖していくことで、下人の老婆への暴力＝快楽を暴露し、「闇を語るという行為が抱え込まざるを得ない死角そのもの」（石川巧）を剔抉するところまで突き進んでいるのではないだろうか。「羅生門」は、下人の行方を考える物語であると共に、「作者」の始まったばかりの終わることのない執筆行為の行方に焦点を当てているのである。

参考

・「今昔物語集」（『日本古典文学大系 26　今昔物語集五』）岩波書店　昭三十八

巻第三十一　大刀帯ノ陣ニ売魚嫗ノ語第卅一

今ハ昔、三条ノ院ノ天皇ノ春宮ニテ御マシケル時ニ、大刀帯ノ陣ニ常ニ来テ魚売ル女有ケリ。大刀帯共此レヲ買セテ食フニ、味ヒノ美カリケレバ、此レヲ役ト持成シテ菜ノ料ニ好ミケリ。干タル魚ノ切々ナルニテナム有ケル。

而ル間、八月許ニ大刀帯共小鷹狩ニ北野ニ出テ遊ビケルニ、此ノ魚売ノ女出来タリ。大刀帯共女ノ顔ヲ見知タレバ、「此奴ハ野ニハ何態為ルニカ有ラム」ト思テ、馳寄ヨリテ見レバ、女大キヤカナル籠ヲ持タリ、亦楚一筋ヲ捧テ持タリ。此ノ女、大刀帯共ヲ見テ、恠ク逃目ヲ仕ヒテ只騒ギニ騒グ。大刀帯ノ従ノ者共寄テ、「女ノ持タル籠ニハ何ノ入タルゾ」ト見ムト為ルニ、女惜ムデ不ミ見セヌヲ、恠ガリテ引奪テ見レバ、蛇ヲ四寸許ニ切ツ、入タリ。奇異ク思テ、「此ハ何ノ料ゾ」ト問ヘドモ、女更ニ答フル事无クテ□テ立テリ。早ウ、此奴ノシケル様ハ、楚ヲ以テ藪ヲ驚カシツヽ、這出ル蛇ヲ打殺シテ切ツヽ、家ニ持行テ、塩ヲ付テ干テ売ケル也ケリ。大刀帯共其レヲ不知ズシテ、買セテ役ト食ケル也ケリ。

此レヲ思フニ、蛇ハ食ツル人悪ト云フニ、何ド蛇ノ不毒ヌ。

然レバ、其ノ躰憖ニ无クテ切々ナラム魚売ラムヲバ広量ニ買テ食ハム事ハ可止シトナム、此レヲ聞ク人云繚ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

・「今昔物語に就いて」より抜粋（『芥川龍之介全集 7』）　芥川龍之介　筑摩書房　平五

「今昔物語」三十一巻は天竺(1)、震旦(2)、本朝(3)の三部に分れている。本朝の部の最も面白いことは、おそらくは誰も異存はあるまい。そのまた本朝の部にしても最も僕などに興味のあるのは「世俗」並びに「悪行」の部である。――すなわち「今昔物語」中の三面記事に近い部である。しかし、――

しかし僕は仏法の部にも多少の興味を感じている。それは仏法そのものは勿論、天台や真言の護摩(4)の煙に興味を感じていると云うことではない。唯当時の人々の心に興味を感じていると云うことである。道命阿闍梨(5)は阿闍梨とは言うものの、和泉式部の情人だった。しかし彼の経を誦する時には諸天善神も歓喜の余り、法輪寺(6)の前へ下って来た。（本朝の部巻二、天王寺別当道命阿闍梨語第卅六）のみならず金峯山(7)の蔵王(8)、熊野(9)の権現(10)、住吉の大明神(11)等の下って来たのは必しも経そのものの功徳に浴したかったためばかりではない。「就レ中にその音微妙にして聞く人皆首を低て不レ貴と云ふ事」のなかったためである。当時の諸天善神も勿論護法に熱心だったであろう。が、彼等の情熱の中にはやはり僕等の音楽に対する情熱もまじっていない訣ではなかった。

更にまた仏法の部の僕に教えるのはいかに当時の人々の天竺から渡って来た超自然的存在、――仏菩薩を始め天狗などの超自然的存在を如実に感じていたかと云うことである。僕等は畢に彼等ではない。法華寺の十一面観音も、扶桑寺の高僧たちも、乃至は金剛峯寺の不動明王（赤不動）も僕等には唯芸術的、――美的感激を与えるだけである。が、彼等は目のあたりに、――あるいは少くとも幻の中にこう云う超自然的存在を目撃し、そのまた超自然的存在に恐怖や尊敬を感じていた。たとえば金剛峯寺の不動明王はどこか精神病者の夢に似た、気味の悪い荘厳を具えている。あの気味の悪い荘厳は果して想像だけから生まれるであろうか？

「今は昔、河内の国若江の郡の遊宜の村の中に、一人の沙弥[15]の尼有けり。……仏の像を写す。……而る間尼聊に身を営む事有るに依て、暫く寺に不レ詣ざる程に、其の絵像盗人の為に被レ盗ぬ。尼此れを悲び歎て、堪ふるに随て、東西を求むと云へども尋得る事無し。……亦知識[17]を引て放生を行ぜむと思ふ。摂津の国の難波の辺に行ぬ。河の辺を徘徊する間、市より返る人多かり。見れば荷へる箱を樹の上に置けり。主は不レ見えず尼聞けば此箱の中に種々の生類の音有り。此れ畜生の類を入れたる也けりと思て、必ず此れを買て放たむと思ふ。……良久く有て箱の主来れり。尼此れに会て曰く、『此の箱の中に種々の生類の音有り。我れ放生の為に来れり。此れを買はむと思ふ故に汝を待也』と。箱の主答て曰く、『此れ更に生類を入たるに非ず』と。……其の時に市人等来り集りて此の事を聞て曰く、『速に其箱を開て其の虚実を可レ見し』と。箱の主白地[19]に立去る様にて箱を棄て失ぬ。……早く逃げぬる也けりと知て、其後箱を開て見れば、中に被レ盗にし絵仏の像在ます。……」（同上。尼所被盗持仏自然奉値語第十七）

この話も樹の上の箱の中に畜生の音の聞えると云うことに美しい生まなましさを漲らせている。金剛峯寺の不動明王を描いたのもあるいは職業的画工ではなかったかも知れない。しかしこの話を作ったものは（もし「作った」と言われるとすれば）小説家でも何でもない当時の民の一人である。彼等は必ず仏菩薩の地上を歩いているのを見たことであろう。それからまた鳶に似た天狗の空中を飛んでいるのを見たことであろう。

僕は前の話を批評するのに「美しい生まなましさ」と云う言葉を使った。美しいか美しくないかはしばらく問わず、この「生まなましさ」は「今昔物語」の芸術的生命であると言っても差し支えない。たとえば、「三獣行菩薩道兎焼身語第十三」（天竺の部。巻五）を見ても、「今昔物語」の作者は兎のためにこう云う形容を加えている。――

「兎は励の心を発して……耳は高く瘟せ[20]にして目は大きに前の足短かく尻の穴は大きに開いて東西南北求め行けども更に求め得たる物无し。」

「耳は高く」以下の言葉は同じ話を載せた「大唐西域記[21]」や「法苑珠林[22]」には発見出来ない。（この話は誰でも知っている通り、釈迦仏の生まれない過去世[23]の話、―Jātaka 中の話である。）従ってこう云う生まなましさは一に作者の写生的手腕に負うていると思わなければならぬ。遠い昔の天竺の兎はこの生まなま

しさのあるためにいかにありありと感ぜられるであろう。

　この生まなましさは、本朝の部には一層野蛮に輝いている。一層野蛮に？――僕はやっと「今昔物語」の本来の面目を発見した。「今昔物語」の芸術的生命は生まなましさだけには終っていない。それは紅毛人(24)の言葉を借りれば、brutality（野性）の美しさである。あるいは優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。

注

（1）インド。巻一―五。　（2）中国。巻六―十。　（3）日本。巻十一―三十一。　（4）密教の秘法。薪を燃し、一切の悪業を焼滅する法。　（5）藤原道綱の長子。和歌をよくし「道命阿闍梨集」がある。「阿闍梨」は僧の職名。天台・真言二宗の高僧が任ぜられる。　（6）京都市右京区にあり。真言宗。　（7）四天王寺。大阪市天王寺区にあり、聖徳太子の建立。　（8）社寺の長官。　（9）金峯山寺。奈良県吉野郡金峯山上。開祖は役小角と言われ、金剛蔵王を信仰する修験道の本山。　（10）熊野三所権現。熊野三山の主祭神をいう。和歌山県東牟婁郡。　（11）住吉神社。大阪市住吉区。中古には和歌の神として信仰された。　（12）奈良市にある法華滅罪の寺。国分尼寺の本山。十一面観音は国宝。　（13）未詳。　（14）高野山上にある真言宗総本山。弘法大師の開基。「不動明王」は国宝。智証大師作と伝える。　（15）初心の僧。また、尼。　（16）私事。　（17）名僧。　（18）捕えられた生物を放ち後世を祈る事。　（19）ちょっと。　（20）せむし。　（21）唐の玄奘三蔵撰。三蔵法師のインド西域地方旅行記。　（22）唐の西明寺の道世撰。経論の説話を集成したもの。全百巻。　（23）ジャータカ（サンスクリット語）。本生譚。最古のインド民話集。釈迦が前世に経験した因縁事を現世の出来事と比べて説いたもの。　（24）西洋人。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　この小説の構成を四つの場面に分け、それぞれの場面での「下人」の心理の移り変わりを整理してみよう。

【答】

①　羅生門の下で雨やみを待っている場面

1　失職と雨で行き所がない。
〈途方に暮れる〉

2　手段を考える。
〈飢え死にを避けるために手段を選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがないと考える〉

3　決断をためらう。
〈結論を積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいる〉

4　大儀そうに立つ。
〈ともかくも、夜を明かそうと、思考を先延ばしする〉

5　はしごを目にする。
〈上なら、どうせ、死人ばかりであると、高をくくる〉

②　人の気配に気づき「楼の内」をうかがっている場面

1　誰かが火がとぼしていることに気づく。
〈恐る恐る楼の内をのぞく〉

2　老婆を目撃する。
〈「ある強い感情」（「六分の恐怖と四分の好奇心」）が起こる〉

3　老婆の行為を見つめる。
〈恐怖が少しずつ消えていく〉
同時に、
〈「老婆に対する激しい憎悪」「あらゆる悪への反感」が一分ごとに強さを増して燃え上がる〉
〈許すべからざる悪と判断する〉
〈盗人になる気でいたことなどは忘れる〉

③　老婆を捕らえて老婆の行為について尋ねる場面

1　老婆をねじ倒す。
〈老婆の生死を握っていることを意識する〉
〈憎悪の心が冷める〉
〈「安らかな得意と満足」の気持ちが生まれる〉

2　老婆にその行為について問う。
〈老婆の答えが平凡なのに「失望」する〉
〈失望と同時に、老婆に「憎悪と侮蔑」を感じる〉

④　老婆に対して引剝ぎを実行する場面

1　老婆の話を冷然として聞く。
〈ある勇気（盗人になる勇気）が生まれ、迷いが消える〉
〈飢え死になどは、意識の外に追い出される〉

2　老婆にその論理を確認する。
〈老婆を嘲り、老婆の論理を逆手にとって着物を奪う〉

▼ポイント▲　「場面分け」を中心とした段落構成は「構成」1に従う。心理の移り変わりは「構成」2の表組を元にしている。本文を指示できるように、引用を主としながら、下人の行動の流れに沿って心理の変化を整理した。

2　老婆の話から、老婆の、自己の行為についての弁明の要点を二点にまとめてみよう。

【答】

1　老婆が髪を抜いている女は生前蛇の肉を干し魚と偽って売っていた。悪いことをした者は悪いことをされてもいいのだという論理。〈悪には悪で報いてよい〉という〈応報の論理〉である。

2　老婆が悪いことをしたのは、しなければ飢え死にをするのだからしかたがなくしたことである。しかたがなくした悪を悪とすることはできない、それは大目に見るべきものだという論理。〈生きるために「しかたがなく」する場合、悪は悪と言えず、許される〉という〈生存の論理〉である。

▼ポイント▲　先ず語られるのは〈応報の論理〉である。これは相手に応分の非があることを強調することで、悪をする側の後ろめたさを薄める効果を持つ。責任転嫁の論理である。次の〈生存の論理〉は、「しかたがない」という言い方で、強いられた状況の必然に一切を委ねる責任解除の論理である。また「許される」という点では、全的情状酌量の論理であるが、御都合主義的な〈お互いさまの論理〉が含まれている。生存の限界状況に関する悪の問題については、古来「カルデアネスの板」（一人しか板にすがって生存できないとき、相手を溺れさせてよいか）として知られる問いがある。法的には「緊急避難」に当たるものだが、これは文字どおり「緊急」の事態の回避の際に専ら適用される法理である。老婆の日常的な生存の状況が緊急に当たるのかは考えなければならない問題である。老婆の論理を口実にする下人が限界状況にあるのかについては、多分に疑問がある。限界状況という言葉を下人を含めて主題的に「羅生門」に用いることには慎重でなくてはならない。

3　髪を抜かれている女と老婆の行為には、どのような共通点と相違点があるか、考えてみよう。

【答】　自分がお金を得て生計を立てるために行ったという点では共通しているが、老婆の行為は、生前に悪事を働いた死者を利用することは許されるという論理を付け加えていく点と、動物の肉ではなく人間の死体の一部を利用している点が異なっている。

▼ポイント▲　女は確かに太刀帯を騙してはいるが味もよいということで露見しても大きな実害があるわけではなく、いわば言葉巧みに偽物を高く売りつけることに成功してきた。老婆もまた、もし女の死体から取った髪の毛による鬘が完成して売る時は、同様に言葉巧みに偽りの由来を語って高く売りつけるかもしれず、共に商品経済の中で身を立てようとしている点は同様かもしれない。しかし本人（や遺族）に無断で人間の死体を利用する点は、下人にとっては、禁忌に触れているかのように感じている可能性も考えられる。口を閉ざした死体として登場した女は、老婆による物語を通して、下人にとってはたくましく生き抜こうとしていた存在として捉えられるのではないだろうか。一方、あわただしく悪の連鎖の中での許しを主張する老婆が、女性美や生命の象徴であるかのような女性の黒髪を抜く行為に、若い下人は、無意識のうちに嫌悪感を募らせているのかもしれない。女の死を利用す

る老婆の姿に、未来において同様に死体になってしまうかもしれない自分の死への冒瀆を想像していた可能性もあるだろう。

4　下人の「勇気」とはどのようなものか、本文に沿って整理してみよう。

【答】

① 門の下の場面の「勇気」
「盗人になる」ことを積極的に肯定する勇気＝〈進んで悪を選び取る勇気〉
ただし、この場面ではこの勇気が欠けている状態である。

② 楼内を見る場面
「老婆の行為」を許すまいとする勇気＝〈悪を憎み懲らそうとする勇気〉

③ 引剝ぎの場面
「盗人になること」を決断し実行する勇気＝〈進んで悪を行おうとする勇気〉

▼ポイント▲　③について「ある勇気」（一九二・7）として要約的な説明があり、「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」（一九二・8）、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」（一九二・9）と言いかえられている。①は、本文に『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気」（一八五・8）とあり、上記では、「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」と指定されている。②は「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気」の部分を指す。「全然、反対な方向に」というのは、〈善に向かうものと悪に向かうもの〉の謂である。上記の要約的な説明から、①と③は同じものとされるが、作中の下人の心の変化に即してみると、①は選択の論理的帰結に対する肯定の勇気で、続いて実行への踏み込みは予想されるとしても、明確な意識化はされていない段階である。③は明確に実行への意志を持つ。また読みの問題として、①が「盗人になる」ことへのためらい（勇気の欠如）は意味しても、それが直ちに「盗人になる」ことが「悪」だから躊躇がある（すなわち「悪」を選ぶ勇気が欠如している）と同定できるか疑いが残る。

5　小説内に登場する「作者」について、
(1)　「作者」とはどのような人物か、考えてみよう。
(2)　こうした「作者」が登場することで、小説全体にどのような効果が生まれるのか、「旧記の記者」（一八八・9）と比較しながら考えてみよう。

【答】

(1)　例えば書斎や書庫で「旧記」を参照したり、「Sentimantalisme」というフランス語を知っていたりと、大正時代の知的教養を身に付けている人物と捉えられるし、知識を衒学的に鏤めながら語る気取った一面や、古典の世界を現代の視点から捉え直し、新たな小説を構築しようとする野心を持った「作者」であることを想像することもできる。

(2)　現代（作品発表時）とは異なる時代を舞台にした虚構世界を

構築しつつあると明示することで、同時代の読者の立場や価値観に寄り添いつつ、しかも新聞「記者」のように事実中心に記すのではなく、小説内の出来事や登場人物への「作者」の価値判断や距離感も作品内容として呈示していることを仄めかす。

▼ポイント▲

(1)　初出時は「Sentimantalism」（英語）だったが、初刊からは「Sentimantalisme」（フランス語）へと変更されることを紹介し、近代日本におけるイギリスとフランスのイメージの違いについて調べてもらうのもよいかもしれない。和漢洋の才を「作者」が縦横無尽に駆使している振る舞いもまた、小説前半の重要な一要素と考えられよう。

(2)　「旧記」という言葉は本作で二度使用されているが、あくまで過去の出来事の記録を自由自在に活用する現在の「作者」が書きつつある世界であることが、最後まで読者には意識される構造になっている。読者が読んでいる内容は、「記者」による記述の単なる引用やまとめ直しではなく、「作者」によって総合化された作品であり、近代以降に成立した小説という文芸ジャンルであることを示しているとも言えよう。

言葉と表現の解答例

1　次の「分」の意味・用法を辞書で調べてみよう。

(1)　何分かの後（一八六・7）

(2)　六分の恐怖と四分の好奇心（一八八・8）

(3)　一分ごとに強さを増してきた（一八八・16）

【答】

(1)　一日二十四時間の現在の時刻表示の単位の一つで、一時間の六十分の一の長さ。ここは数分間の比較的短い時間の経過を示す用法。

(2)　全体を十に分かって割合を示す単位、十分の一の意。ここは、大ざっぱな配分比率を示す用法。

(3)　(1)に同じ意。ここは、比較的短期間の変化を一定の単位時間で刻む用法。

▼ポイント▲　「分（ふん）」は、時間、長さ、角度、尺貫法の重さなどの単位などになる。また「分（ぶ）」は、割合、利率、温度、貨幣、尺貫法の長さなどの単位となる。(1)古来の辰刻法では分は現在の三分に当たるが、それでは長すぎる。(2)は「盗人にも三分の利」「五分五分の形勢」「六分の俠気、四分の熱」などの例があげられる。比率といっても、「割分厘」の「分」（1％）ではない。(3)を、(2)の意味で段階的増加、十分の一刻みのステップアップと解する者がいるかもしれない。その意味なら「一分ずつ」とあるはずである。なお、(1)と(3)は関連するが、一方で「申の刻下がり」（一八四・8）という伝統的な時刻表示を用いているのに対し、時間経過は近代の単位呼称によっている。歴史小説の形を借りた近代小説という創作意識の所産であろう。

2　「ほかならない」（一八四・5）「暇はない」（一八四・16）「語弊がある」（一八八・15）を用いて例文を作ってみよう。

【答】

例１：すばらしい結果を残せたのは彼の努力にほかならない。
例２：試験当日の朝だというのに、ラジオ体操を第二までしているような暇はない。
例３：語弊がある言い方だが、本音を言うくらいなら、嘘をつくほうがいい。

▼ポイント▲

「ほかならない」は、断定や強調をしたい場合に、文中で効果的に用いよう。「暇はない」は、ニュアンスとしては日常会話では用いにくいので、余裕がないという文脈でユーモアのある表現に添えてみると効果が出る。「語弊がある」は、伝える言葉の選択がよくないために起こってしまう状況を想像すると思い付きやすい。あえて不適切な言い回しを用いる場合にニュアンスが伝わる。

３　本文中から動物を用いた比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

①　犬のように捨てられてしまう（一八五・２～３）
　「捨て犬」への連想で、人間以下の扱いで無造作に捨てられる様子を言う効果。「捨て犬」の惨めさは主人から捨てられた今の下人と重なる効果もある。
②　猫のように身を縮めて（一八六・８）
　危険に対して身構える動物的な本能を感じさせる効果。
③　やもりのように足音を盗んで（一八七・６）
　気配を消して闇をはう様子を表す効果。
④　猿のような老婆（一八八・５）
　人間のレベル以下の異形のものとしての印象を与える効果。
⑤　猿の親が猿の子のしらみを取るように（一八八・11）
　老婆の行為が動物の本能的なしぐさとして印象づけられる効果。
⑥　鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕（一九〇・３）
　いかにも痩せこけて細く、肌の荒れている様子を思わせる効果。
⑦　肉食鳥のような、鋭い目（一九一・１）
　油断のならない貪欲さと不気味さ、また強い警戒心を表す効果。
⑧　鴉の鳴くような声（一九一・３）
　不気味さとずるがしこさのこもる耳障りのする響きを感じさせる効果。
⑨　蟇のつぶやくような声（一九一・９）
　陰にこもり、濁った低い声の響きを感じさせる効果。

▼ポイント▲　個々の効果とともに総合的、複合的な効果にも注意したい。①は単独で下人の惨めさを表し、②と③は不審な物事に対する下人の本能的な警戒心を特徴づける。④～⑨は、全て老婆の醸し出す人間の埒外に堕ちた者の雰囲気を伝える。陰にこもる薄気味の悪さ、狡猾さの印象である。同時に指摘しなければならないのは、これらは老婆の行為の理由がはっきりする前の比喩（直喩）であり、荒廃の世にかつがつ生を営む無力な老婆の姿が明らかになった時点で、動物の比喩は、小動物の生に類する弱々しく哀れな老婆の生の姿に対する比喩へと働きを転じて、そのみすぼらしさやいじましさ、また生に執着するしたたかさや小ずる

さを印象づけるものとなることである。

4　本文中から「ばかり」を用いた箇所を全て抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

・選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。（一八四・16～一八五・2）
・そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしまうばかりである。（一八五・2～3）
・上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。（一八六・3～4）
・下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた。（一八七・1～2）
・ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。（一九〇・3）
・後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、安らかな得意と満足とがあるばかりである。（一九〇・10～11）
・じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。（一九一・10～11）
・現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。（一九一・12～13）
・下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。（一九二・10～11）
・はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。（一九三・4）
・外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。（一九三・10～11）

本作では下人の思考の「局所」に伴って最初に用いられる。その後、何度も用いられることで、極限状況だと思い込んでいる「下人」の緊張感や、ほかに行動の選択肢に思い至れない中での物語展開の緊迫感を生み出す効果が考えられる。いわば「局所」に過ぎないはずの一つの行動と共に小説の外部へと飛び出していく、下人の心の動きの速度と呼応しているとも捉えられる。最後の「ばかり」は老婆から見た夜の光景に用いられるが、光がない世界へと走り去った後、老婆と同様に読者も、そして「作者」も、下人の行方を追うことができないような限定された場へと取り残されているような余韻を残すことになる。

▼ポイント▲　「ばかり」は「はかる」の連用形が転成した名詞「はかり」に由来する副助詞であり、物事を限定する意を表す。下人の視野や世界観の狭さや、老婆との限定的な状況の雰囲気を、この「ばかり」の反復がリズムと共に醸し出している。

言語活動の解答例

1　末尾の一文から想像される下人のその後の姿を、文章にまとめてみよう。

▼ポイント▲　発展学習の課題である。下人の人物像を描くための、下人の行動の意味づけという点でこれまでの作業と地続きになる。下人の行方は、読者の想像における「人間の行方」であり、さらに言えば「主題の行方」ということになる。下人の駆け下りた「夜の底」、残された「黒洞々たる夜」の闇がどんな象徴的な意味で読まれたかによって、さらには、作品全体からどんなイメージを得たかによって、中断された未来は多様な展開を示すであろう。

2　本文と『今昔物語集』巻二十九第十八「羅城門（らせいもん）の上層（うはこし）に登りて死人を見る盗人の語（こと）」（一九五ページ）を比較しながら、「下人」の行動について、肯定・否定の立場に分かれて議論してみよう。

▼ポイント▲　小説の舞台設定自体、主典拠の「今昔物語集」の話とは、主人公の現状、羅生門のありよう、時間の設定に大きな相違がある。失職し、餓死か盗人かと迷う若い男は、主典拠では、はっきり盗みをするために上京した男である。雨の夜の羅生門のおどろおどろした雰囲気の演出もない。嫗の行為を目撃しての男の心理は、「これはもし鬼にやあらむ。」「もし死人にてもぞある。」恐る不敵さを示すものである。老婆の話は事情を言うだけで、悪へのこだわりはない。男もためらいなく奪えるものは奪って去る。原拠は現実を見据えた簡潔で鋭い切れ味の描写に終始し、野性味ある自然児のふるまいはまさに民衆世界の説話にふさわしい。小説「羅生門」の近代的な人間心理の劇との対比がはっきりする。その上で、小説「羅生門」の下人に注目していきたい。「盗人」になるかどうかの逡巡、面皰、空回りする正義感の変化、主人から暇を出された直後という心理状態、老婆からは金目のものとは言えない服のみを奪うことは重要である。また、本当に盗人になる以外に選択肢がなかったのかどうかについても考え、その上で、老婆への行為について議論していく。議論では勝ち負けにこだわらず、肯定側と否定側の両方に回って想像力を養っておくことが、単元の言語活動につながるはずである。

（大塚隆夫・荒木美智雄、補筆：小澤純）